家庭雜誌

第參拾五號

大國民の氣象を養成すべき事
大國民の氣象は大事業の源となり、國民膨脹の始となる。

眞言宮
彼等が胸は玻璃の如く透き徹りて、ありくと文字見ゆ。

砂上の文字
春の夢さめて、簷端に蝶一つ。

貧女
禍福は廻る車の如し。

海濱の快樂
如何に不思議なる生活を、彼等がなすよ。

◎牛乳ノ如ク飲ミ易ク且好味ナリ

◎此スコット乳菓中ニアル肝油ハ如何ナル胃弱ノモノモ少シノ滞リナク容易ニ服用シ得ル樣ニ調化シアルモノナリ

◎筋肉ノ製造者トシテ有名ナルスコット乳菓ハ肺病、瘰癧、精神疲勞、小兒ノ衰弱症及慢性ノ咳嗽ヲ治スルニ最好最良ノ調劑トシテ夙ニ歐米諸大醫ノ賞賛措カザル處ナリ

◎龍動スコット及バウン謹製

日本一手特約販賣所　米國貿易商會

横濱廿八番
神戸十七番



◎賣捌所ハ全國至ル處ニアリ

純粹ノ肝油及次亞燐酸ノ配劑ナル

スコット乳菓

徳富猪一郎著

國民叢書 天然と人

定價二十錢
郵税四錢

各新聞雜誌の批評

●何んぞ其題名の快ちよきや、夏に際して讀まざる可らざる可らざる心地す。何れも、一度は見たるものゝ編輯に過ぎざれど、國民新聞に出し所云る傍觀傍聽記か、徳富君の筆に成りしとは意はざりき。之のみ眼を刮つて新らしく再讀し、今尚ほ鮮味を感ずるなり。(女學雜誌)●國民新聞と國民之友に連掲せし紀行と議會の面白き議事を集錄せしものなり定價二十錢の厚き小冊子なりと雖ども之を繙けば自から夏の長き日を忘るべし(都)●「天然と人」は民友記者徳富蘇峯が隨見隨錄なり故に境により處に依りて筆に曲折多く其の幽なるものは深谷の如く其の奇なるものは夏雲の如く尖なるものゝ鋭なるものゝ交互錯總として其の觀を擅にす綠陰清晝竹床に仰臥して快讀一番す暑魔驚き去ること三千里(新朝野)●國民新聞に連載せる蘇峯生の記事之を集めて、一卷と爲せるものなり、北窓綠濃なる邊、仰臥此書を播かば、九十度以上の熱をも忘れん、日清の大戰爭を忘れん、實に是れ一包の清涼劑なり、心理的銷夏秘法なり。(教育時論)●いつ讀でも厭くよを覺へざるは蘇峯氏の文なり清風裏籐榻に臥しながら此書を讀んで華胥國に遊ぶは豈に心理的銷夏の最上法に非ずや、著者が此の書を著はすの意も此れに外ならざる也(經濟雜誌)

内田不知庵著

十二文豪號外 ジヨンソン

定價廿錢
郵税四錢

各新聞の批評

●十八世紀英國文學界の眞誠男子硬骨なる文豪ジヨンソン氏の性行實歷を敘したるものなり故に本書を見ればジヨンソン其人を想見すると共に英國十八世紀の文學をも概見するを得るなり操觚者たるもの一本を坐右に具へざるべからず(毎日)●此書は十二文豪號外にして内田貢氏の著也試みに讀み去る吾人は未だジヨンソンの生涯を盡したりと認むる能はず然れどもジヨンソンの行實は稍ゝ寫し得たりと信ず今の文學に志す者幸に之を讀んで身の程を知れ(めざまし)●十二文豪の號外として民友社より發行せり夫れジヨンソンは第十八世紀の巨人たることは人皆な之を知る然れども其行實と其著作の眞價とを知らんとする者は此書を讀むに如くは無し(都)●學者としてジヨンソン我輩之れを知る偉人としての彼れ亦我輩之れを追慕す本書は簡潔に而白く斯人を寫し出せしものなり午睡の代りに讀んで見よ得る所また尠少ならざるべし(二六)●奇偉卓落の文豪ジヨンソンは内田氏の靈腕によりて遺憾なく紹介せられたり余輩は此の書に依りて此の文豪若くは文豪以上の巨人を我文界に見んと望むものなり想ふに著者其人は心竊に之を擬せんと望むものにあらずや(新朝野)

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

民友社發兌銷夏書目

夏の日は來れり、綠蔭沙邊に座して、長天大海を睥睨する處、山莊水亭に臥して、蟬聲流水を靜聽する處、利益と快樂とを以て、必ず好伴侶たらんものは本社發兌の銷夏書籍に如くはなし、請ふ把つて身邊に置け、

徳富猪一郎著　久保田米僊畫

四版 誕生日

定價十五錢　郵稅二錢

詩あり、歌あり、語あり、句あり、美麗なる插畫あり、父母親戚朋友弟妹の手蹟帖として、清潔高美なる家族の間に、薰風の吹て、紗幮に入るが如く、幸福、和樂、融情、平康の福音を齎すものは則ち是れ、

櫻痴居士　福地源一郎著

三版 幕府衰亡論

定價卅五錢　郵稅六錢

其の論は宛轉雄渾、其の文は雍容豐富、其の事は則ち實地目擊の所、歴史の快味は斯の如き好著に依つて知らるべきなり、

再版 懷舊

定價貳拾錢　郵稅四錢

ヴヰクトル、ユーゴー著　森田思軒譯

ユーゴーの文は豪宕徹底、思軒居士の譯筆、神驚鬼哭、忽ちにして黒風、忽ちにして白雨・讀一過番腋下涼冷を覺ふ、讀んで必ず其味を知れ、

十二版 歸省

定價拾五錢　郵稅四錢

湖處子宮崎八百吉著

忽ち深林の中に明月を賞し、忽ち幽邃の境に哲理を考へ、忽ち紗窓の下に愛人と語る、人生の得意思ふべきなり、其の純雅鮮淨の文字を誦するに至つては、北海の堅氷を嚙むの感あり、

徳富健次郎纂輯

再版 近古歐米 歴史之片影

定價貳拾錢　郵稅四錢

本書を讀むは、猶ほ江邊雨霽るゝ時の如し。烟嵐稍々稀微にして、岸樹現はれ、蜑戸出で、帆檣露はれ。遠山浮び、棹歌來り漁舟去る。忽にして英雄、忽にして名士、忽にして風流、忽にして戰爭、忽にして都會、忽にして村邑、或は學術、或は政治。

徳富猪一郎著

四版 國民叢書 文學斷片

定價拾五錢　郵稅四錢

長江大河、浩々蕩々として、中に鱷魚を棲ましむるものは、長篇を云ふ也。靜溪潺湲、野花點綴、中に香魚の游泳を數ふるは、短篇を指す也。香魚を釣る、最も快、鱷魚を擧するは更に快更に雄。避暑休課の士、何ぞ奮て此快遊を試みざる。

德富猪一郎著

八版 國民叢書

靜思餘錄

定價拾五錢
郵税二錢

一種の詩、一種の宗敎、一種の哲學、民友氏が人生に關するの理想は此篇に彰はる。淸譚の淺きに似て深きは其敎訓なり。稻葉を渡し夕風の如きは其文なり磯馴松の蔭、山樓半夜の燈下、靜かに讀んで心身無限の快樂を覺ふるものは靜思餘錄也。

四版 國民叢書

青年と教育

定價拾五錢
郵税二錢

此の夏の間に心身を一新し、來る秋より大に奮つて勉めんとする志ある青年の、速やかに購讀せざる可からざるものは此篇也。

四版 國民叢書

人物管見

定價拾五錢
郵税二錢

我名士を論評する快刀大竹を割る如く庖丁の牛を解く如く一見快風胸間に生ずるは人物管見也。

六版

一語千金

定價五錢
郵税貳錢

千金とは假りの價なり。若し能く咀嚼し、實行し、操守するの人あらば、一語猶能く一生の大豪たるを得べし。是時に於て、豈啻だ價萬金、萬々金のみならんや。

德富猪一郎著

十版

新日本之青年

定價貳拾錢
郵税四錢

新日本の青年よ、讀め「新日本の青年」を！健全眞摯懇篤忠實なる敎訓箴言を以て滿てる無言の朋友は爾の來り披くを待つ、

竹越與三郎著

七版

新日本史 上

定價四拾錢
郵税六錢

竹越與三郎著

再版

新日本史 中

定價三拾錢
郵税六錢

長江一瀉滔々千里の文、走馬燈の如き新日本の事件、讀み去て氣朗に心快なる新日本史は、夏時の讀料に尤も適せるものなること、皆是世人の知る所。

德富猪一郎著

四版

吉田松陰

定價五拾錢
郵税八錢

語快、人をして舞はしむ。語悲、人をして泣かしむ。語齒、人をして冷ならしむ。語憐、人をして惜ましむ。語險、人をして危ましむ。語愼、人をして、密ならし

む。語怒、人をして劍を按せしむ、語激、人をして筆を投せしむ。語高。人をして雲に入らしむ。語低、人をして石を下らしむ。單に文章を論ずるも吉田松陰は斯の如きものあり。

德富健次郎纂譯

五版 武雷士

定價拾五錢 郵稅四錢

德富健次郎纂譯

四版 格武電

定價貳拾錢 郵稅四錢

德富健次郎纂譯

再版 グラッドストン

定價貳拾錢 郵稅四錢

政治界の三大偉人、傳記界の三大傳記、其人學ぶ可く其文誦す可し

竹越與三郎纂譯

三版 格朗宅

定價貳拾錢 郵稅四錢

三百年前大疾飈の如く英國を震蕩したる大英雄、著者一枝の筆に驅られる一小冊子の中に鑒在す一瞥また以て横行深山の當時を思ふ可し、

平田久著

三版 伊太利建國三傑

定價貳拾錢 郵稅四錢

十九世紀第一快絶の大舞臺十九世紀第一流の三名優、筆立ち墨走り三雄眼前に舞ふ我維新の事歷に考へて無限の感胸底に湧かん

四版 第一國民小說

定價拾五錢 郵稅四錢

玉の如く、珠の若し、渾然として圓に、瓏然として明なり、圓なるは情の濃なるを似めし、明なるは心の曇なきを示す、

五版 第二國民小說

定價拾五錢 郵稅六錢

泉に似て、流に似たり、滂漫として湧き、滔々として干く、湧くものは盡きず、興窮なきなり、干くものは漲らず、感暴ならざるにあり、

三版 第三國民小說

定價拾五錢 郵稅四錢

草の若く、樹に似たり、衣袂を染むるの綠、靜涼を送るの翠、共に是れ快感の限なきにかたどる、讀書の樂玆に極まる、

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

社告

家庭雜誌は凡て前金に非されば發送せす、見本は郵劵五錢五厘にて呈す、郵便爲替の拂渡局は芝口支局、本誌代價の郵劵代用は爲替局の無き地に限り可成五厘切手にて一割增

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵税共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)前金	五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)同	金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十十番

編輯發行兼印刷人 垣田純朗
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治二十七年八月十日發行

家庭雜誌第參拾五號

目錄

社説

文藝

科學

家政

雜錄

時事一斑





家庭雜誌第參拾五號

(明治二十七年八月十日發兌)

社説

大國民の氣象を養成すべき事

諺に樹木の皮に刻みたる文字は樹木の成長すると共に成長すと云へることあり。幼少の時の感化は洵に驚くべきものにして、善きも悪しきも深く其性情に刻まれ、永く消失することと稀なれば、人の父母たるものは、其子女を敎育する上につき、豫め一定の意見を有し、最も注意して終始健全なる感化を與ふることを勉めざるべからず。

健全なる感化とは手短に言へば、其子女に大國民の氣象を起さしむることとなり。固より大國民の氣象を起さしむることが都ての健全なる感化を意味するにはあらざれども、身躰精神の健全が常に道德の健全を意味すると共に、堂々たる大國民の氣象は常に大業をなすの源となり國民膨脹の始となるものなり。

世界列國の間に立ちて大なる日本を建設すべき重任を帶べる未來の國民の爲めには、これより須要なるものなかるべし。

大國民の氣象と云へば極めて漠然たる如くなれども、言換ゆれば、何となく雄大なる所あることとなり。何となく鷹揚なる所あることとなり。何となく健全不屈なる所あることとなり。何となく自尊自重なる所あることとなり。何となく質實なる所あることとなり。何となく責任的なる所あることとなり。何となく勤勉なる所あることとなり。要するに進取有爲の人たるべき氣風に富めるとなり。」

然らば如何にして此くの如き氣象を養成すべきかといふに、自ら是れ境遇の感化に由ること多くして、大國に

生るゝものは知らず識らず斯る氣象を帶ひ易き所なれども、教養の力も亦與て大なるものなり。

第一に家風は最とも多く其子女の氣象に關するものなり。餘りに放縱に過ぐれば彼等をして驕慢ならしめ易く、餘りに苛嚴に過ぐれば彼等をして陰欝にして猜忌心深く一種のねじけたる人とならしめ易し。去れば人の父母たるものは子女の性情を美はしふするに先ち、其家風を美はしふし、鷹揚なる中に敬虔なる所あり、和樂なる中に勤勉なる所ありて、常に希望油然たる趣あらしむるを要す。此くの如き家庭あらざれば其子女に大國民の氣象を帶びしめんとするも困難の事なり。」

第二に日常注意して、成るべく無意義ならざる自尊心を鼓舞すべき事なり。小兒はいづれもゑらきを愛し、假初にもゑらしとの稱賛を博せんと思ひ、人の話を聽くにも好で其如何にゑらきやを問ふものなれば、多くの場合を利用して彼等の自尊心を養ふべし。唯無意義なる自尊は驕傲の別名なれば最も注意して之を避け、之をゑらしとするには必ずゑらかるべき事實のあらしむること肝要なり。人は少長を問はず、隱れたる長所能所を知らるゝより知己に感ずるは莫く、最も當れる稱贊を得たるより自ら奮ふはあらず。

第三は遊戲に對する方針を定め置き、彼等の好む所に由て何時も進取有爲の傾向に導くべし。遊戲は其異日天職に就くが爲めの最も貴き練習なるを知らずや。

第四は史談若くは時事談を利用して彼等が國矜心を養成すべし。是れ自尊心を擴張して義俠の精神を含ましむるものなれば、大國民の氣象は最も多く此の上より養はるゝなり。三檣船に駕して亞細亞大洲の東南岸を横行したる勇敢なる祖先を語らば、彼等が小さき胸は躍るべし。軍艦の寫眞に對して、南陽灣の海戰に清兵千百人を打ち沈め敵艦を捕獲したる勇ましき物語を聽かしめば、彼等が眉は昻り彼等が睡たき眼は再び圓ろ

やに見張らるべし。又喇叭を吹き去る兵士を指して、成歡驛外の大激戰は清國の精兵二千八百人を破碎したるを知らしめば、彼等が手は舞ひ足は其踏む所を知らざるべし。

第四には大に國民的詩歌を作りて彼等に謠はしむべきことなり。言辭は須らく平易なるべきも、思想は成るべく優美壯大なるものなるを要す。自由、進歩、獨立、平等、勇氣、人、日本國、國民、旭日旗、富士山、太平洋、櫻花、天、船、豐大閤、蒙古來、小兒、遊戲、學校、此等は皆無二の好題目にあらずや。

此外稍長じたるものは伴ふて共に旅行することもあるべく、英雄豪傑賢女才婦の傳記を語りて其立志を促すこともあるべく、世界の地理を敎へて知見を擴張せしむこともあるべし。今一々枚擧するに暇あらざるなり。唯返す〴〵も自家の前途の多望なるを覺知せしめよ。

文藝

眞言宮

湖處子



仙香

ある處に、ハリー、セオッ、メリー、三人の兄弟ありき。ある日渠等は例日の如く、學校へと母には告げて、家を出で、村はづれに來かゝりけるに、頃しも春も闌はにして路傍の麥圃より、思はぬ雲雀のあがりければ、ハリーは飛びあがつて喜び、面白からぬ學校にゆかんより、雲雀の巢を見つけむには如かしと云ひ、妹のメリーも早速に同意しければ、ゼオッは一人、母

を欺くこと甚だ心ぐるしく思へど、一人は二人に勝たず、强ひられければ隨ひぬ。
宛然詩人の夢の如く、彼處、此處と、雲雀の巢を尋ねあるける間、榮黄麥緑、糸遊のあそべる野邊より、渠等はいつしか宏大なる黃金の宮に到り、渠等の前に、優しく美はしき女王の立ち玉へるを見き。渠等は惶ぢ惑ひて爲す所を知らざりしを、女王は側ちかく招きよせて、個個が名を問はれ、さて「君たちはよく來れり、何ぞもの欲しくはなきや、菓子なりとも進すべきや」と宣ひければ、兄弟たちは暫く顏見あはせてつぶやきたりしが、ハリーはいと耻かしげに女王を見て、「何卒と云ひければ、女王は微笑し玉ひて、「いづれも佳き子よ、我が後へにつきて來ませ」と、先に立ちて宮に入り、渠等を一室に待たせて内に入り玉ひぬ。
渠等は玉を敷きたる宮にありて、畏る〳〵天井四壁を見回はしける裡、ゼオヂは不圖兄なるハリーを見たるに、ハリーの胸、宛然玻黎鏡の如く透き徹りて、あり〳〵文字の浮べるを見き。ゼオヂは愕き、ハリー〳〵胸を見よ、胸を見よ、御身の胸に、文字の書かれぬ。「ナ」の字、「マ」の字、「ケ」の字、「モ」の字、そして「ノ」の字。「ナマケモノ」と書かれたり」。と云ばハリーも、之を見て恥かしく、兎に角と胸の鈕を箝めなほして、隱さんとすれどすこしも隱れず。百方すれども、依然として弟妹の目に見え、自個の目にもかゝりぬ。忌々しさに堪えず、我ばかりかはと、ゼオヂが胸を見れば、ゼオヂが胸も透きとほりて文字浮び、「イクヂナシ」とありければ、それ見よ顏にゼオヂをやりこめければ、ゼオヂも赫と赤面したるが、忽ちに口を開て、「否々我は意氣地なしにあらず、我か何時人に負けるとありしや」と云ひ張るを、メリーはうち消し、ハリーが雲雀の巢を捕んと云ふ時、御身は學校に徃かんと云ひつゝ止まりたる故に、「イクヂナシ」と書かれたる

なりと云ふに、ゼオジもハタと行きつまり、口をモグ〳〵させて見たれど、答ふる語なく、ソッと帽子をはづして胸にあてゝぬ。されど胸に隠せし詮なきは、猶ほハリーの鉦の如くなりけり。

二人の胸までかくある上はと、メリーも窃かに自個の胸を見て、赤き面をあげて「我が胸にも」と云へり。彼は學校にあがりてより、幾日もたゝねば、未だ我が胸の字を讀み得ざりき。彼は二人の兄弟に、齊しく「オテンバ」と讀みあげられ、笑はれて、耳も熖ゆるばかりに恥ぢぬ。然れども是まで屢母の云ふとを肯ず、他の一言に、十言を返すおしやべりなりしかば、如何とも云ひ消す能はず、唯噓なり、噓なりと、小聲に怨するに過ぎざりき。

渠等は女王が來玉ふ時、自個の胸を見て、何と宣ふべき乎を心に恐れぬ。渠等は菓子の欲しさも忘れて、只管學校に往かざりしを悔ひたり。

忽ち女王の來玉ふ足音しければ、渠等は恰も躰操の時の如く、一度に掌を胸にあてゝぬ。女王は訝しげにその故を問ひ玉ひしに、二人とも默して云はねば、ゼオジは獨り默止しかねて「許し玉へ、我等は斯く仕つけられたり」と答へぬ。

渠が斯く云ふ時、胸に不思議の感觸を感じ「イクヂナシ」の文字消えて、「ウソツキ」の文字顯はれたり。後に立ちたりしハリーは、その更換する樣の、恰も影人形の變る樣に似たりと思ひて、我を忘れて吹き出したるが、女王の眞面目なる顏に、ハリーは自から靜まり、ゼオジは自から赤面しぬ。

其時女王は小どもに告げて「是處はこれ眞言の宮なれば、苟且にも虛言を云ふべからず。虛言を云ふ人は、虛言人と胸に書かれて、誰が前にても讀まるべし。と宣ひければ、ゼオジが頭は、沈むばかりに下りぬ。ハリーは遁れぬ所と思ひ、思ひ切つてはや其胸に文字書

かれたれば、女王の見玉はんを恥ちて、斯く手を以て掩へる由を答へぬ、其時女王は「我には其文字手を透しても見ゆ。いと氣の毒の事なりかし。さるにても、今朝御身等は、野邊にて何をか爲玉ひつる」。

ゼオヂは僅かに頭をあげて「我等は今朝學校にゆくとて、雲雀の巣を尋ねあるきぬ。我は學校にゆかんと云ひしかとも、二人とも肯かざれは……」。

女王「宜し宜し、そを再たびな仕玉ひぞ。母を貽く罪はふかし。子として親を貽むくものは、必ず胸に不孝の兒と記されて、世人より讀まるへきぞ。入後再び母の命をな背き玉ひぞ。

ハリー「今までの罪は、何卒ゆるしたび玉へ。是よりは改めて母にもつかへ、學校も勉強せん。されば何卒胸の文字を取りたひ玉へ。これありては、學校にも往くと能はず、家にも歸るとならねば。

女王「我はそを取り去ると能はす。何となれば我か書きたるものにてあらねば。實にこは御身たちの心より、自ら作せる禍なれば、自ら其心をたに改め玉はゝ、文字は自から消滅すべし。此菓子は御身たちに與ふるへく持ち來しものゆゑ。御身一個を取り玉へ、御身一個、御身も一個を取り玉へ。いざ時移らぬ内に歸り玉へ、再ひ路ぐさをな摘み玉ひそ」。

渠等は菓子を戴きて出てぬ。渠等は其菓子を、母に見せたる後にあらずは食はずと。やさしくも皆衣兜に收めぬ。宮の門を出づるや否、文字は消えて、胸はもとのものとなりぬ。やかて以前の野路を出てければ。ハリーは、「もはや宜し、皆來れ、家に歸らん、」と云ふを、メリーはうち消して、「否々宜からず、我等は母を貽むきたれば、母は必ず我等か怠りを痛み玉はん」と云へば、ゼオヂは「さらば今より學校にゆくへし、一二時間後れたりとも、往かさるには勝れるなり」と云ふに、餘の二人も同意しければとも〳〵に學校へと急きぬ。」

熊と狸

仝人

其處に三匹の熊ありけり。森の繁みの奥に家を持て、三匹一處に住睦ましく住みけり。この一匹は、いと大なりければ大熊と呼び、一匹は中くらゐなりければ、中熊と稱へ、今一匹はいと小なりければ小熊と名のりき。

渠等は各汁壜を持てり。大熊のは大壜、中熊のは中壜、小熊のは小壜なりき。渠等は又寐床を持てり。大熊のに大寐床、中熊のは中寐床、小熊のは小寐床なりき。」一日渠等は晩餐の爲めに旨き汁をつくり、其の冷るまて、散歩かてら森をあるきぬ。

熊が散歩してありし間に。終日遊ひあるきて餓えたる狸、食をあさりて熊の留守宅に來りぬ。渠は先つ背の窓より覗ひたるに、誰もあらざりしかば、前に回りて戸を開きぬ。戸は鍵けてあらざりき。何となれば渠等は皆善き熊にして、自分等が誰にも仇せざる如く、他も亦自分等に仇するものなしと思ひたれば。

狸は容易く戸を開きて入りぬ。渠は容易く卓上の汁壜を見出しぬ。若し渠善き狸なりしならば、必らず熊の歸り來るまて待ちしなるべし。何となれば、渠等は善き熊なるが故に、饑たる渠を見ば、賓客ともして饌すへければなり。然れとも渠は心穢れし輩なりければ、直ちに其壜に口をつけぬ。

最初に狸は、大熊の壜を嘗みたるに、猶ほ渠に熱かりき。さてはと小壜を嘗みたるに、小壜はまた冷過きたりき。最後に中壜を嘗みたるに、熱くもなく、冷たくもなく、丁度よき加減なりければ、まづ中壜より吸ひ初めぬ。中壜を吸ひ終る頃、大壜もよき吸ころとなりけれは、又大壜をも吸ひ盡しぬ、渠は既に甚たしく量を過こせり。渠は是を以て止むへきに、渠は小壜を選

すと能はず、之をも飲み盡してければ、今は動けずなりし上、頻りに眠の兆し來りぬ。

渠は暫らく眠んと、大寐床に坐りたるに、大椅子は渠か爲に硬きに過ぬ、さらばとて小寐床に坐りたるに、こは又餘り柔らかすぎぬ。中寐床に坐りたるに、硬くもなく柔くもなく、丁度よき寐加減なりければ、暫くと思ひしまゝ、時も知らす寐過したり。

此時熊は其壜の冷たるへしと思ひて歸りぬ、歸り來りて旨汁を啜らんとして、壜の空しきを見て、大熊は大聲に「誰か我か汁を吸ッてる」と怒れば、中熊は中聲に「誰か我か汁を吸ッてる」と怒り、小熊は小聲に、「誰か我か汁を吸ッてる」と怒りぬ。

大面、中面、小面を互に見合せ、渠等は盜賊詮議を初め、各々寐床を撿しけるか、大熊は其枕の覆りたるを見て「誰か我か寐床に寐居ッた」と大聲に怒れば、中熊は驚き遁ける狸を手捜り、「誰か我か寐床に寐居た」と中聲に怒り、小熊は飛び來る狸を捕へて、「誰か我か寐床に寐居ッた」と小聲に怒れり。

渠等は友を愛するか如く、また敵をば容さゞりき。渠等は今狸を捕へ、渠を責めて其晩餐を償はしめぬ。熊の汁を啜ひし狸は即夜熊の汁となれり。

砂上の文字(下)

或眠むたき午後、妾は雜誌も讀みあき、話もしあきたれば、山百合の花折りて床の間の花瓶に挿まむと、後ろの小山に攀ち上りぬ。

海は午日に油の如く淀み、磯の眞砂は蹈むに堪へぬまで熱する時には、山には自づから清凉の氣のこもれるあり。今朝の露の猶未だ乾かぬ下草、下草の間に可憐に咲ける撫子花、松風に聲を競ふ蟬蜩、何處よりともなく袖にしむ百合の花の香。松の間より打眺むれば、

海は鏡の如く日光の下に眠り、磯に浴客の姿も見ず、田に草取る男の影もなく、渾てのもの皆休息に入れる景色、いとも靜かなり。妾は草蹈み分けて開き開かぬ幾枝の百合を折りつゝ、木蔭涼しき山道を歩み居けるに、忽ち横手の小徑にサヤ／＼と小篠を分くる物音して、何ぞと振むきたる時は、何時の間にか妾が跡を跗け來りし從兄は已に妾が前に立てり。

屹と据はれる兩眼、一文字にしきれる其唇、容子ありげなる其有様に、妾は退きもやらず近づきもやらず、百合の花手に持ちたるまゝ唯立ちぬ。

從兄は徐ろに口を開き「先日より少しく御身に語る可き事ありて、唯二人ある可き機會を覗ひしが、今日御身の獨り山に往かるゝを見たれば、斯くは跡を逐ふて來れる次第なり」と冒頭を置きて、彼は久しく其胸に包みたる可き思ひを一時に傾け盡しぬ。即ち此度の上京は兩人か間の契約を更に取り固めんとの母の念願なれ共、自身は寧ろ此約束を今にして中絶するをよしとせざるや否定め兼ねたる事、其仔細は、兩人が境遇異なり學問異なり從て思想感情インテレスト渾て相異なり居れば、強て曩時の約に從て婚を結ぶは、寧ろ双方の不利にあるまじきや否容易に定め難のみならず、自身は草深き田舍の土に塗れて成長したる田舍漢にて、思ふ所は田畠春秋の種刈、一家の經營、廣ふして一村の利害に過ぎず、文字と云ふ文字は小學校を出でゝ以來殆んど目にも觸れず手にも書かずと云ふ樣の有樣なれば、都の風に吹かれ上水の水に洗はれ學問に寢食して嫻雅なる青年紳士に多く識られたる淑女の心を繫ぐ可きにあらず云々云々。彼が言は急湍の石に咽んで下るが如く迸り出でぬ。

妾は何れの處に到りて彼が言葉の止まりしやを知らざるなり、妾自身は如何なる言葉を以て之に答へ、如何に之を辨解し、如何に之を打消したるやを知らざるな

り、唯全く吾に返へりて眼をあげたる時は、日は靑松の西に傾きて、蜩の聲の中に山のかげ次第に長く、風ソヨ〳〵吹きて單衣の袂を煽り、而して妾が足もとには無殘にも百合の花の瓣の引きちぎられ引き裂かれて幾個ともなく落ち散りたるを見たり。妾は百合の花を折らむと山に來れり、而して折りし花は皆な傷られぬ。然れども妾が——吾等が心には幸福なりき。

＊　＊　＊　＊

吾等が間の屏障一ト重撤し去られしより、彼は愈快活にして天眞爛熳の彼に復へり、妾も亦幾多の知己幾多の吾浮世的富と位と裝飾風采とを有てる渇仰者の前にありて彼を隱然吾有爲の人と告白するを憚からざりき。彼等の中、或者は之が爲めに來り訪ふことを已め、或者は吾等を嗤笑の材料とし、さま〳〵の蜚語を放ちて吾等を傷けむとし、殊に是迄每日の如く妾が許に遊びに來れる某有爵者の子息の如きは、妾が從兄に對して直接に間接に無禮の擧動多く、妾をして憤懣已む能はざらしむるものありしと雖も、一點の光明は千頃の暗黑を照らし明かす如く、心の幸福はまた心外の不快事を物の數ともなさしめざりき。

＊　＊　＊　＊

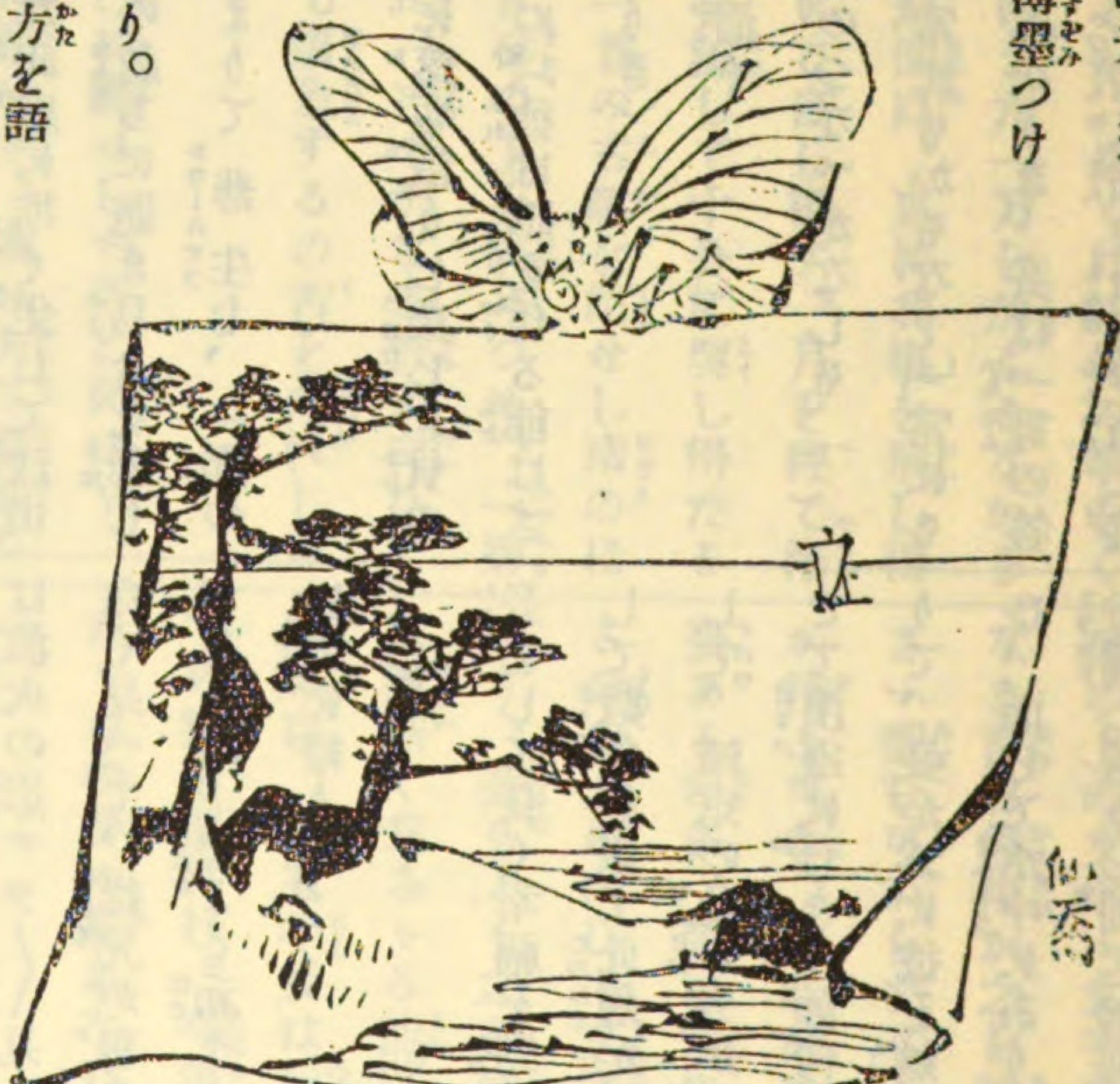
斯りし間に日數立ちて、叔母も從兄も明後日は早や歸京す可き時となりぬ。

此日晝過ぎ夕立ありて、日は涼しく夕に向ひぬ。夕食は早く濟み、沐浴も早く濟み、叔母は所要ありて近きほとりに出でぬれば、妾は從兄と打連れ立ちて濱邊に出でたり。明後日は早や袂を別つ時かと思へば、暫らくの別れも亦何となく暗愁の源なりき。

吾等は雨後の緣り殊に鮮やかに夕日に映れる稻葉の畷を通り、風吹けば露はら〳〵と袂に降りかゝる靑松の林を潛り、捨小舟の雨にぬれし砂に居へけるほとりに立とまりぬ。此處に平なる岩あり、岩のほとりには濱

撫子の花一兩三凉しき夕風に打點頭き、名をしらぬ紫きの花一ばひに白砂を覆ふて咲きはびこれり。眼を擧ぐれば、碧瑠璃の海に夕日の光りまばゆく、遠き豆州の山々は薄墨つけし刷毛もて拂へる如く、富士は日を背にして紫の色に變り、近かき山々は雨後の翠滴るばかり。風はソヨリ〳〵面を吹きて鬢のオクレ毛五月蠅からぬほどに舞ひ、チョロ〳〵足もとまで走り來る漣は二人が會話を妨げぬ程にさゞめき歌へり。

吾等は岩に座して語りぬ。越方を語り、行末を語り、語りて言なきに到りて日は西に沈みぬ。



夕暮れの濱邊に出で來る人の影もなく、程離れし海人が家には藻塩燒く煙り靜かに夕べの空に立ちのぼり、海の面はまばゆき光り消へてやう〳〵に暮れ初め、遠くは何處の港を指せるにやあらむ白帆の夢の樣に過ぎて行くあり、近きほとりには漁人の小舟漕ぎ行く櫓聲啞啞として、節面白き滄浪の一曲二曲夕べの渚に滿ち渡りぬ。

吾等は語らざりき、言葉よりも深く思は語る能はざる程に心に滿ち〳〵たれば。

吁人生は是れ何ものぞ、百年の身に千載の憂あり、塵もて作れる心臟に死もまた滅す能はざるの愛を懷き、

心は萬年も生きむと欲して、身は蜉蝣の一夢を出づる能はず。吁古人も亦斯く夕暮の海に向ひて打嘆きぬ。吾等枯骨となるの後、誰かまた此處に斯く坐して江山の永久に盡くるなうして人生の忽ちに盡き易きを悲しむものぞ。思ひ來れば歔欷極まりて悲生じ、一點の暗愁水の如く妾が心を浸せり。

久しく默し居たる從兄は、傍に落ち散りし美しき貝の殼もて砂の上に斯く書きつけぬ、（彼は歌を作る能はざりき、彼は多くの歌を知らざりき）

世の中は常にもかもな渚漕ぐ
海士の小舟のつなでかなしも

ア、是れ實に妾が心なりき。「常にもかもな！」「常にもかもな！」ア、是れ眞に妾が心なりき。妾は一言の答も得せず、唯彼が手を取りて一點二點の白帆夕暗に暮れ殘る海の面を打眺め、暗涙の睫を傳ふを覺へざりき。是れ幸福の涙か、是れ悲哀の涙か、妾は實に其何の爲めの涙なるかを知らざりしなり。

日は全く暮れぬ。空には三點四點の星生れ初め、海には漁火の影チラ／＼見へ初め、吾等が着たる浴衣のみ白く見へて、從兄が書きし砂の上の古歌の文字も見へずなりぬ。勢よく初まりし吾等が話は無言に終り、笑は涙に終りぬ。

＊　＊　＊　＊

妾をして長く幸福を語り短く悲哀を語らしめよ。妾をして數句を以て此短かき話を終へしめよ。願くは妾をして、歸京の前日妾が從兄が如何に單身海水に浴せむとて濱邊に行き、如何に些細なる事の爲めに水中にありて、妾が爲に彼を嫉忌せる都の風流少年等と相爭そひ、而して水中にありて彼が勇ましくも多勢を相手に爭鬪し居りし間に如何に彼恐る可き黑潮の餘波鯨の如く吼へて遠洋より押し寄せ來り、如何に彼も彼等も妾が戀も望も幸福も盡く彼恐る可き墨よりも黑く冥府

よりも暗き黒潮の餘波に葬られ、如何に其髪一ト筋だに渚に打寄せらるゝこともなく全く大海の藻屑となり果て、如何に其母の落膽せるか、願くは此等の事をくりかへし話して新に心の創にまた一刀を加ふるなからしめよ、妾が其事の後幾日が間は、更に其事を解し得ず、幾週の間は殆んど涙だにこぼし得ず、月を經て漸く過ぎにし事を思ひ得、涙を流して十分に哭し得たることも、幾度か彼夕彼れが一首の古歌を記せし渚のほとりを歩みて今は痕だになき砂の上を眺めつめ、一碧藍の如き平かなる海を眺めて、冷やかなる波に向ひて涙流せし事も、幸に妾をして煩叙するの苦を免れしめよ。

讀者若し妾に向ひて、御身已に嫁せしや否と問はゝ、妾は答へて云はむ、妾は已に嫁せり、妾が夫は都城の西南なる一小邱巓の籬に夕暮の颪寒く夕日の空に鴉の聲淋しきほとりに立てる〇〇〇〇之墓と刻せし孤墳は即ち是なり」と。

＊　＊　＊　＊

砂の上の文字！文字は消へて已に久しくなりぬ、容赦なき波は幾度か之を洗ひまた洗ひて、今は其痕も夢にさへ認む可からずなりぬ、然れど彼記憶！記憶は何時か消ふ可き、何時かは消へ果つ可き。

憂ある毎に、妾は常に彼濱邊に行きて、彼の洗ひ消せる砂の上に向ひて文字の痕を求む。あゝ是れ空しき事なり、妾もよく之を知る。妾よく之を知る、而して妾は猶斯く爲さゞる能はず。否々妾が生命此世にあらん限りは、年又年妾は行きて彼濱邊に行きて消えにし文字の痕を問はむ。今年の夏も、明年も、塵の浮世にうたゝねの夢の醒めなむ時までは。　（完）



貧女

筑峰女史

めぐる禍福は世の中の習ひにしあれば、今月前いかなる榮華を盡すともいつか憂き目にあはんも知れず、げに行く水の流れに同じき人の身の上、こゝにいぶせき一構へは不破の關屋にあらなくも、軒もる月に身の上のいとゞ不幸を嘆きつゝ思案にくるゝ二親と一人の娘は、けふのたつきに困じてやむかしの榮華の追想なし、初めて浮世の夢さめて悔むも甲斐こそなけれ、いかにかなしてたつきの道にありつかんと思ふにまかせぬ老の身は、いつれの稼業も出來難く、せめて娘に仕事だに習はせをきたらんには、かくまで暮しに困じやすまじなど、兩親の語りてさめ〴〵となげきかこつをもれきく娘も物案じ胸ふさがりて言葉も出でず、餘りにめで給ふ父母のふかき情をよきしほとあたら月日をうか〳〵と打すごしけるこそ口惜しけれ、とはいへ今更悔むも詮なき事、いで是よりは何なりとたつきの道を見出して、行く先短き父母の御心を少しにても慰さめんよすがやいかにと、夜となくひるとなく千々に心をくだけども思ふにかひなき乙女の悲しさ、いかにやせんととつをいつ思あんにくるゝ夕べに、立つる煙りのそれならでとぼす油も月夜故からくも今夜はすごせど、あすのたつきをいかにすべき、何不自由なき其時はいつもかくぞと思ひしを、あすか川の定めなくこの零落は何事ぞと、思案の果はなくばかりなり、かくては果てじ、今更嘆くも詮なし、ことわざに犬もあるけば棒にあたると己れと氣をとり直し、市中に出でてそこはかとなく見巡り、何か出來べきわざやあると尋ねしかども、是と思ふよき思ひつきも無きものから、又も困じ果てつゝ、徃事行末をくらべて人知れず袖をしぼり、すご〳〵と我家をさしてたどる道すがら、日暮れとな

れば夜店を出すも多きその中に、はからず目につく傍らの露店に、年はか行かぬ小娘が少し計りの帽子をならべ、客待ちしながら一筋に麥はら帽子のひもをあみ、稼せぎにひまなき有樣を見るにつけても面白く且つは感じつゝ、この小女こそよき師なれと思案を定め、紐の組み樣より一日何ほどの利益あるやなど尋ねしに、いと細やかに敎へくれ、親しく手をとりてまで說き示し、彼れ是れとするうち夜も更けて店を形つけ歸るべければ、我家に來ませと云ふに任せ、小女が家に行きけるに、病の床に伏したる老母と二人暮し故、心をきなく打明けて一伍始終を物語れば、彼女も共に涙ぐみ妾も同じ不運の身の上にて、父には別れ母のみ在せど年來の病氣に家財道具も賣代なし、兼て覺えし手業にてやうやく口糊をしのぐなりと、いにしむかしを語り合ひ、たがひに袖袂しぼりけるが、神も憐み給ふかや、いと感ずべき小女にめぐり逢ふとは不幸の中のさちなりと、拜謝しつ、其夜は別れて次の日より通ひ、帽子編むわざを一心に習ひつゝ、やがて覺えて夜となくひるとなく稼せぎしかば、いつしか其の業も上達し、多少の收入ある樣になりしかど、我が身の奢りには一文も費す事なく、父母の孝養怠りなかりしかば、をちこちに其名も高き孝女の鏡と人に云はるゝまでとなり、注文先の人々も孝女〳〵と愛しみ、多くの仕事を命せられ、何不自由なく暮す身となりし、これ全く彼の小女故なりと集ふ注文品を分ち與へ、果は住居をも共になし、互に稼ぎを勵みしかば、ほどなく富有の身となり、三人の老人も喜びの眉を開きける、是につけても世の令孃達今の榮花にふけらずして、まさかの時の用心に糊口の助けともなりぬべき仕事を何なり覺え置かるゝこそ緊要なれ、此くは貧女の物語りを記し、世の人の誠草とはなし侍る。

科學

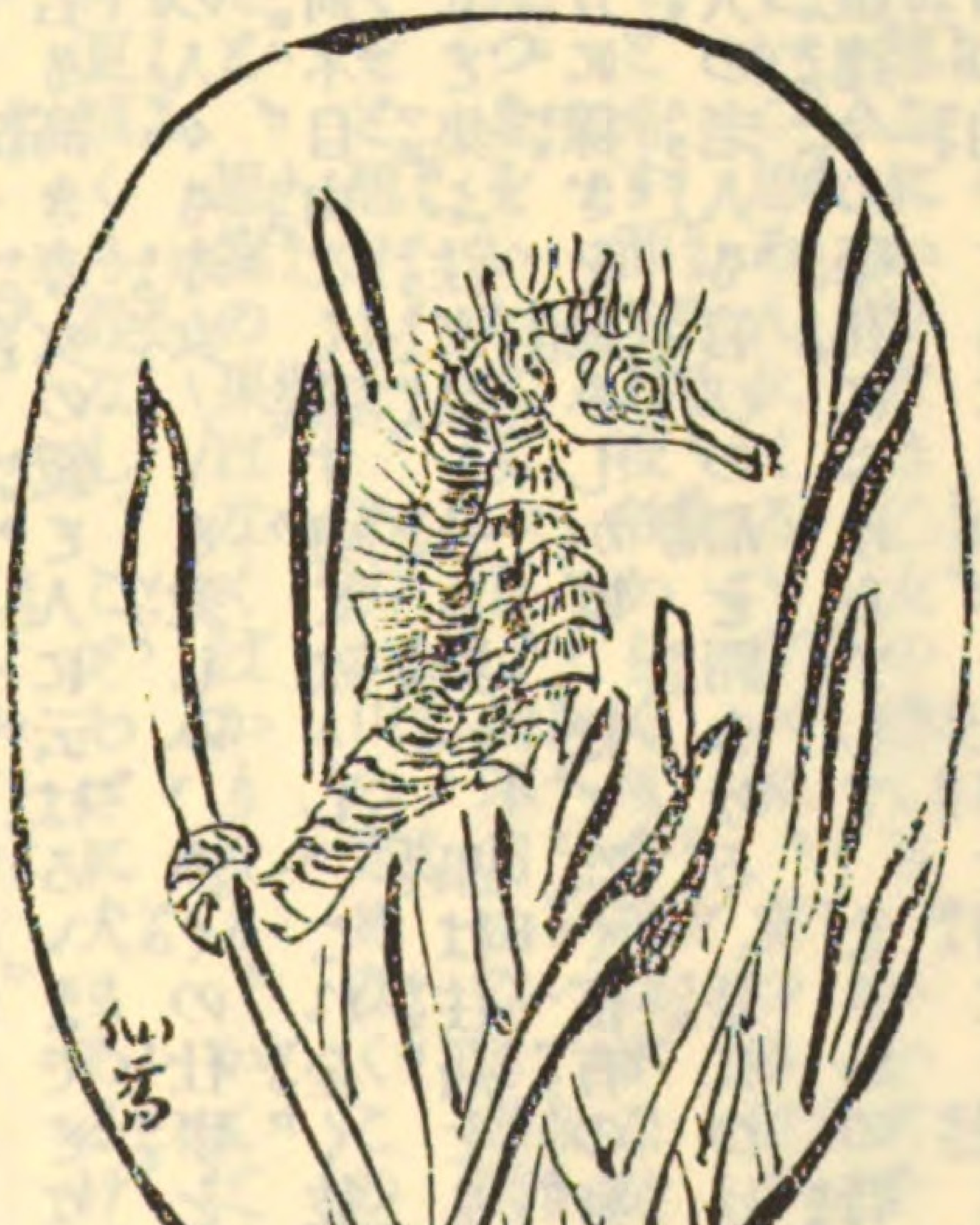
海濱の快樂　其五

第四、ストルジオン

前號の紙上には、一二三科に分かちて、魚類の種類を委しく記るしたり。第四はガノイヂアと稱するものにして我國にては、餘り其類を見ざれども、歐洲の大河中に多く住する、ストルジオンと稱する魚類等はその一なり。ストルジョンは、一見鰐に似たる魚にして、脊に骨質の小皿の如き鱗なり。大なるものは時に千ポンドの餘ありと云ふ。

第五、テレオスレオスチア

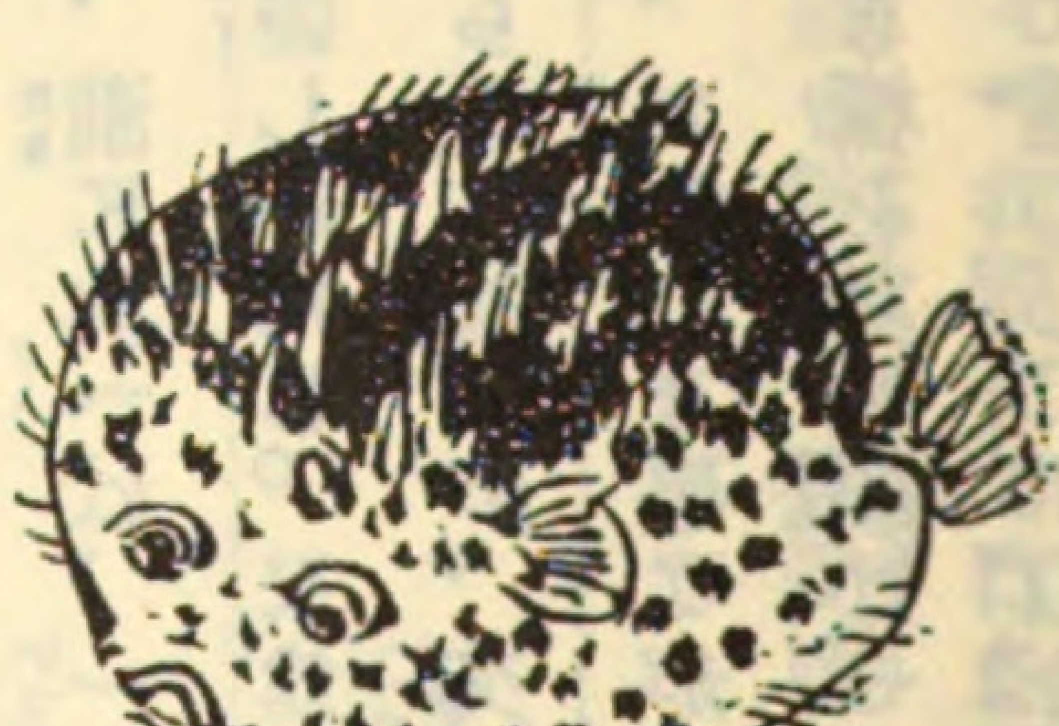
此科は更に六種に分たれたるが中に、奇々怪々なる者少なからず、圖に示したる海馬を見よ、之其科中の一なり、其頭の如何に馬に似るかを見よ。其尾の如何に地虫に似るかを見よ。我等がアトランチック、スペイン、フランス、大英國若くは地中海の海邊に遊ぶ時は、此奇怪なる動物は、よろ／＼と游泳せるを少からず見るを得べし。或る人二匹の海馬を捕へて、共に飼ひ置きたるに、彼等は出會ふ度毎に喧嘩を初めたり。喧嘩と云ふは、尾と尾とを組み合せて、上になり下になり、伏せつ伏されつ、暫時喧嘩を爲し、充分なりと思ふ時は、腭以



海馬の圖

て、近くの藻草に引き掛け、尾の結すぼれたるを解く。たゞに喧嘩の時のみならず、尾は常に手の働を爲すが故に、彼等の食物と爲すべきものに出遇ふ時は、其尾を以て巻き付き、生け擒るなり。脊の中央にひろ〳〵としたる薄すき四角なるものあり。之れは鰭にして、水中を游泳するに缺くべからざるの道具なり。躰の大さ、僅かに四吋を越へず、食物は、海底の有機物、若しくは、魚類の卵を好む、此の科の中には、尚ほ海豚、飛魚、翻車魚、鱵屬、フワイル魚、鞄魚、煙管魚、ストシアスボーア、麻痺鰻等の怪魚を含くめり。

海豚は誰れも知る如く、砂地の海中に群生する魚にして、甚だ氣短じかくして、怒り易く、怒りたる時は、ぷうと腹を膨くらして、殆どおもちやのゴム球の如く、魚の形はなきに至る。膨くるゝわけは、胃の中に空氣の満つるが故にして、彼若し海底にある時、身を浮かべんと欲すれば、同じ膨れ方にて身をかろくするを得るなり。海豚は上下に鋭利なる庖刀の如き、二枚の歯を有せるが故に、物に襲はるゝ時は、その歯を以て、



海豚の一種クロープ魚の圖

之れを防せぐ、漁師の小供が、度々指を噛み破らるゝは、其鋭利なるが故なり。

第六、フヰソストマタ

人類の食物として、欠くべからざる、鯡、大口魚、鮭、鯉、梭魚等は、皆な此の科の中に含まれたり。此の内には随分面白きものあり、鮭の瀧上りの如きはその一なり。

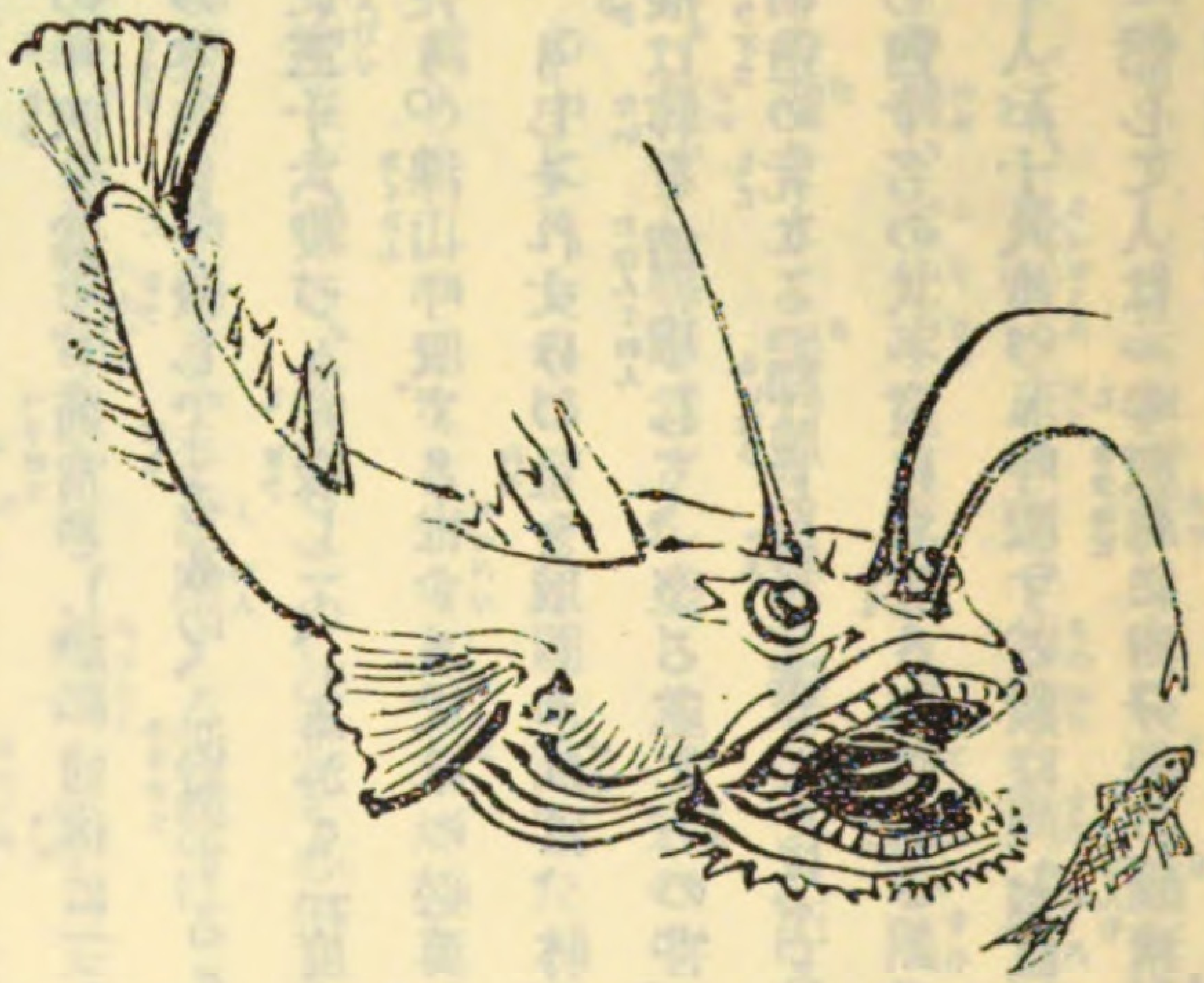
鯉の瀧上りは人々の知る處なり。鮭も亦た瀧を上るとあり。英國は特に有名なる多くの瀧を有するが、アイルランドなるダブリンの近邊にレークスリップと云ふ處あり。此地に高さ二十呎の高き瀧あり。忍耐の强よ


鮭の瀧上り

き鮭は、此の高き瀧を幾度か上りそこねては又試み、過つては又た試むる、その樣の面白さは、わざ〳〵見物に來る人々踵を接すと云ふ。中には種々の工夫を凝らして、瀧の近邊に下り、籠を供へて魚の飛び過ちて、落つるを生擒になすもあり。鮭は何故に苦勞して飛び上るやと云ふに、元來鮭は鹽水にも眞水にも住するを得、時には高き山の上の水の中にも住するが、海中に住する親魚、產卵の時に至れば、川に登り來りて、卵子のために餘りに鹽からくなき處に至りて產卵し、再び海中に下るを常とすれば也。かくて殘こされたる子供は、だん〳〵長ずるに隨がひ、をそる〳〵鹽を求めて海に下り、長じては又た川源に上りて產卵す。眞水を求めて上る時、瀧に向へば、一跳して飛上せんとす。其美觀言語に盡しがたし。又他に面白き魚あり蛙魚と云ふ。人に釣らるゝ其魚が、又た他の魚を釣るべき針を有するとは、おかしき事ながら、蛙魚と稱する魚は、そのおかしき樣を身に顯はせり、此魚は賢しこく躰の全躰を砂中に隱くし、不似合なる大なる頭に、天然の釣竿を付けて、高く砂の上に出し、きよろ〳〵としたる目に、大なる口を廣く開きて、何時にても待ち

受け、靜かに身を置けり、かくとも知らで、他の小魚は、如何にも甘まそうなる肉の一片あり、いで取りて

天然の釣竿を有する蛙魚



食せんと、前後も見ず勇さんで近より、早や一口と云ふ所に、下なる大將は、それ取らしてたまるものかと、云はぬ計りに、がつぷと一呑に小魚を口中に禁錮す。それのみならで、針の如く、尖りたる齒にて、骨迄通れと、噛み下すなり。我國にては此類の中にて殊におこぜと稱する魚、最も數多く見受けらる。

家政

夏の問題

遙か彼處より走り來れる車夫を見よ。靜かに立ちて見つゝある我等が、一度呼吸を爲す間には、彼は二度も爲せり。何故ならんか。彼の肺は甚だしく顫動したる爲めに、その必要に應ぜん爲め、常の二倍の空氣を要せるが故なり。

人の肺が朝より吸ひ込む所の空氣を一々袋に入れ置き、夕方に至りて計算する時は、二石一斗六升の大量

となるべし。これは一日の兵糧として餘りに多ほ過ぐるが如きに似たれども、恐ろしき毒物なる炭素を防ぐには、是非共之れを要するなり。靜かなる人は、一分時間に十八回の呼吸を爲すを通常とし、一回毎に三合一勺四抄づゝの空氣を呼吸し、走るもの、激動するものは、一秒時間に三十六度づゝ呼吸して、志かも一度の量通常に越へたり。澤山呼吸するはする丈けの必要起るが故にして、もしそれ丈けの量を取らざれば、躰に害ある黒き血液は躰を循環して、至る處にその害を及ぼし、身躰構造の元なる、細胞を殺し盡くすに至るべし。故に今若し四十名の人一室に立籠ると假定せよ。一分時間に四十人が十八度づゝ呼吸する數は、七百二十度なるべし。然して人は一呼吸毎に四分一の酸素を吸入し、それと同量の炭素を吐き出だすが故に、四十名の住せる室にては、一分間に四升六合五勺餘の空氣を腐敗せしめて、生活力を失なはしむるが故に、此樣にて一時間も次づく時は、中の人をして悉く死に至らしむるに足るべし。

人躰の血液は二分と三十秒にして、躰の全躰を一週するが故に、其惡しき空氣の中に、一時間も居る中には、惡しき炭素は、幾十度も身躰を循環して生命を失はしむるに至るなり。人は食物なくしても、數日の間は此世に生き長らふを得べし。水なくしても數日の生命は繋ぐを得べし。されど空氣なくしては、一時間否一分も堪へ得べきにあらず。

過る年の夏、或る人、古井戸を掃除せんとして數人の井戸屋を雇ひたり。その中の一人は中を掃除せんとして、綱にすがりて例の如く入りたるが、中に入りたりと思ふ頃、ふと綱は輕くなりぬ。上にある數人の者は、不思議に思ひて十吉よ十吉よとその名を繰り返しくて呼びけるに、更らに答なし。其中或る者は幽靈のたゝりなりと云ひ、或るものはかつぱにさらわれしなり

と云ひ、説まち〳〵にして誰として中に入り撿査せんと云ふものあるなし。かゝる中に其事警察に聞こへ探撿を遂げしに、全く古る井戸にして、炭酸瓦斯の充滿せしが爲めなりしと云ふ。夏の中は殊と更ら物の腐敗し易すくして、臺所の床の下、物置の隅、風呂場の溝、流し先きの溝、不仕末なる家ならば戸棚の隅に迄、腐れたるもの溜まりて悪しき空氣を放なつとめづらしからず殊に、夏ぼし等を爲さんとして、倉の中に入り、或は窖の中に入らんは、一年間に溜りたる悪しき炭酸瓦斯の爲めに二つとなき生命を失ふが如き、危險に陷るの心配なき樣に、兼ねるその注意を心得をくべし。炭酸瓦斯のありや無きやを試驗するの法は、いろ〳〵ある中にも、最も簡便なるは、蠟燭を點じて、棒の先きに付け、入らんとする井戸、或は窖の中に、先づ之を入れて火の消へざるものは、人間に害なく火の消ゆるものは炭素のある證據なれば、入るべからず。凡て燃ゆべきものは、炭素にして、その炭素が酸素に合ひて火を發するものなるが故に、酸素少なき所にては、火は燃へざるが故なり。

夏の午後

夏の夕日はかげり風は涼しきに至れば、相携へて納涼に出づるも樂しけれど、燒くが如き日中には、何れへ出づるも苦しみなり。讀書も時には飽くとあり。中には左程讀書を面白からぬ人もあり。かゝる人には口の樂しみも亦た一つの樂しみならめ、口の樂しみとて半日を食し通さば、胃の害あれども、夕食後の口の樂しみの原料を作るがために、半日の苦を忘るゝも亦た樂しみなり。今其原料の一二を記さんに。

第一、葡萄羹

最早葡萄の時となれり。酸味の中に甘味あり。甘味の

中に一種言ふべからざる香氣を含くめる葡萄は、もはや八百屋の店に積み出だされたり。之れを取りて實と莖とを分かち、虫の付かざる樣能く洗らひ皮を破ぶりて中の實を出だし、更らに種子を摘み去りて、擂鉢にて能く摺り、摺りたる汁一升に付き砂糖三百目、葛粉八合程の割合にて、能く混和せしめ、之れに食鹽少許を入れて暫時微火の上にかけ、沸騰せしめて葛の煮ゆる迄練り上げ、火よりおろして、箱の如きものに入れ、冷へて固まりたるを度とし切りて食用に供すべし。

第二、蒸羊羹

赤小豆一升を三四時間火にかけて、煮へたる頃擂鉢に入れて、摺りつぶし、荒らき布の袋にて糟を漉し取り、別つに砂糖五百目を鍋に入れ、湯を入れて煎じどろ〳〵となりたる時先きの赤小豆を混じ、然る後小麥粉三百目と葛粉十目と少量の鹽とを合せて、水にて解かせたるものを、先きの混和物と、又た〳〵混和して能く練りて餅の如くなりたる時、一寸位の大さに切り、蒸籠に布巾を敷き包みて二時間程蒸すべし。

第三、葡萄水

葡萄の成るべく新鮮なるもの五百目を取り、實と莖とを分かち、實を洗ひて皮を去り布の袋に入れて絞り、其果汁の中砂糖五百目を混じ、清よき水五合計りを入れ、微火の上にかけ、ぐつ〳〵煮立ちたる時、絹篩にて濾し、壜に入れて堅く口をなし、井戸等に冷やしをかば、炎熱燒くが如き時に用ゆるの好料となるべし。

時候物の料理

茄子の鼈甲煮

茄子の未だ杯大にも至らざる位の小さきものを取り、一週間計り鹽漬けとなしをき、さて能く漬かりたる後、出だして、暫時水にひたしをき、然る後湯にて煮出し、

更らに食鹽と、砂糖、蜜にて煮詰むべし。砂糖蜜の製法は、砂糖一斤に水一合五勺、長芋の丸きもの二寸計り摺り込み、能く〳〵混ぜて暫時火上にをき、沸騰せ



しめ、その間絶へず攪き廻す時は、だん〳〵に蒸發して、少なくなるべし。その沸騰してぐつ〳〵と云ふに至れば、少量の水を加へ、又た沸騰せば、又た水を加はへ、五六回もかく爲して後、小さき雞卵一個の白味を取り、半分計りを先きの砂糖汁の中に入れ、再び火上にかけて煮立て、能く〳〵攪き廻す時は、かすの如きものを生ずべし。之れ砂糖のあくの白味に凝着せしものなれば、丁寧に之を掬ひ去れば、殘る汁は即ち砂糖蜜なり。之れは菓子等を作るに最も良品なり。

茄子のさしみ

飯等を煮て、火を引きし後の、熱灰の中へ茄子を埋め灰の上より小さき火を三つ四つ置き、皮の黒くなりたるを度として、取り出だし、皮を去り、肉のみとなし、之れに三杯酢或は芥子酢味噌山椒味噌等を掛けて用ゆれば淡白云ふべからず。

漬物色〳〵

羊羹漬

羊羹と稱する法あり、之れは茄子の花の落ちたる計りなる小さきものを取り、糠味噌に漬くると數日にして取り出だし、之れを鹽出をなして、水を絞り、味啉に漬くること二三週間にして、取り出だせば其色羊羹の如く、美はしくなり、味云ふべからざるに至る。

西瓜の小花漬

西瓜の未だ赤子の頭大の頃取りて、蔕と花とを取り、粕に鹽を加へたる中へ漬け込む時は、一種の佳味あり。

瓜の酢漬

白瓜胡瓜の細そきものを撰らみて、多量の鹽にて鹽漬となし、五六日過ぎたる後取り出だして、瓜より出でたる鹽水にて、漬りたる瓜をざつと煮立て、取り出だし、さまして後酢の中に漬くべし。

胡蘿蔔の味噌漬

若き胡蘿蔔の後先を切り、五六日の間軒につるしおき、然る後薄鹽になして、三日計り漬けたる後、天氣を見計らひて、一日計り天日に遇はせ、然る後味噌に漬くるなり、又た味噌のかはりに粕に入るれば粕漬となるべし。

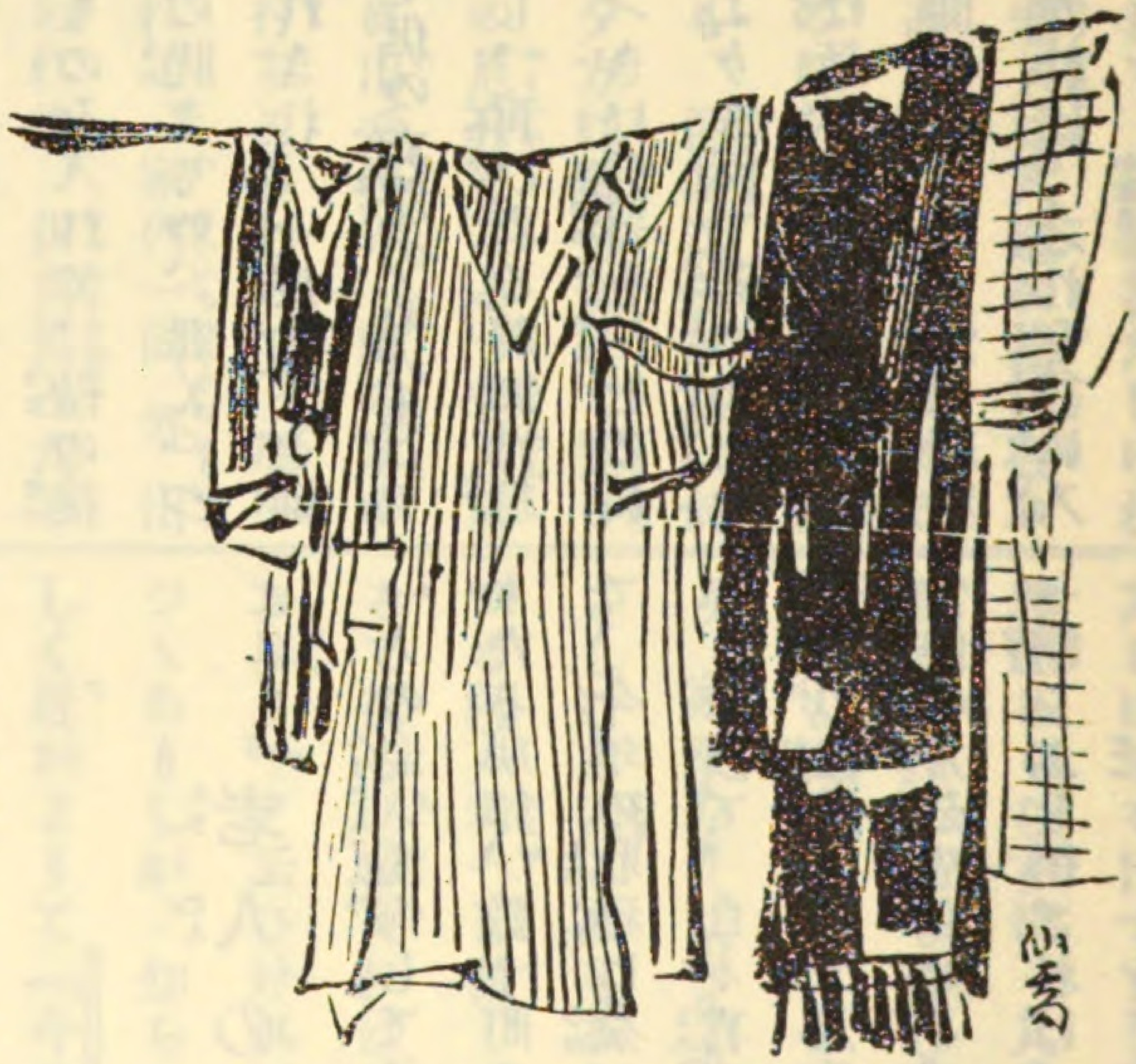
衣服虫ぼしの注意

姑の小言には大抵定めの言葉あり。宅の嫁は是れさへ出來ぬ、あれさへ、知らぬと云ふ言葉なり。さへと云ふは通常出來得べき事の出來ず、知らざるべからざる事の知らざるが故なり。過る日或る家のかどを通りかゝりける時に、内にて老人の聲にて嫁を叱かれるに遇へり『おまへ赤いものを日なたに出すと云ふことがあるものか、色がさめてしまふじやないか馬鹿にも程があるよ、夏ぼし位ひの事は毎年のとだから、能く覺へておいでよ、私しが死んだらどうする積りだね』と、之れ蓋し花嫁が姑に叱からるゝ處ならん。余は今此類の花嫁、虫ぼしの注意一二を記るし、姑の一叱を免かんとす。

何れの家にても土用中には、大切なる着物を始じめ、書物、諸道具に至る迄、虫の付き易きものは、風に介

ふせて虫ぼしを爲すが通常なれども、之れは土ようの中より、反て秋となりて爲すを勝れりとなす。そはどようは濕氣多きものにして、秋は濕氣なきが故なり。秋の日にても特とに晴天の二三日つゞきて。地の乾きたる後を最も良しとす。元より入梅の頃濕氣を受けて黴の生ぜしもの、又たその憂のあるものは、入梅の明くるを待ちて、早く乾すの必要もあれども、左もなきものは、秋に乾燥せしむるに過ぎたるはなし。

衣服は風すきのよき室に廣げて、風を通し、もし黴の生ぜるものあらば、羅紗若しくは覆綸の切れにて丁寧にこすれば、大抵は去るを得れども、若し甚だしき黴の時は、先づ切れを石鹸水に浸すと暫時にして、ほとびたるを見計らい、手にて揉擦り、然る後眞水にて一寸ゆすぎ、その後コロール石灰五匁に水二升四合計りを入て、その水の中に暫くひたしをき、又引上げて、此度は水一升に硫酸一勺を合したる水の中に十分間計りもひたしをき、引出して、眞水にて洗ふ時は、如何なる黴にても落ざるとなし。黴も落とし、風も通したる後は、丁寧に皺をのしてた、



み、不用のものは下に入れ、入用のものは成るべく手近かき處に入れ、小袖のつまのおしつぶされざる樣、褄と褄とを行き違ひに重ね合わせ、その小袖と小袖の間には、帶羽織等の如き短かきものを入れて、褄の接せざるをつとむべし。又た品質の脆きもの、長く一つ處を疊みをかば折れ目の地、すれきれ、一度も手を通せずして破るゝとあり。されば小供の衣服のあげ等は、一年も衣ざるものは悉とくおろし、再び衣る時には縫ひ上ぐるを可とす。殊に注意すべきは、器を淸むるにあり。器の質によりては、衣服よりも反て器に虫生じて、衣服を害するとあり。樟腦は最も好く虫を防ぐが故に、之を袋に入れて、衣服の間にはさむべし。細粉とせし樟腦最も揮發し安きものなれば。之れを袋に入て上より槌等にて打ち堅むる時は堅き塊りとなりて、容易に揮發を防ぐを得べし。其の他色の移るが如き品は、別に風呂敷に包み夜具蒲團の如き綿の入りたるものは、日光に晒らして膨脹せしめ、滌ぐを得べきものは滌ぐ等、小さき事々に心せば、獨り虫ぼしに限ぎらず、姑の小言はいたゞかずしてすむべし。

老人の懺悔談

一人の老人懺悔して云ひける樣、余は家より數町隔たりたる所に、數十町の麥畑を有せり。麥は青々と繁りて、今年の收獲は疑がわずして、その多額なるを知るべきを以て、日々喜びに促がされて、出でゝ見けり。麥畑の彼處には、八造とて、貧しき羊飼住ひけるが、常住の月をもらせる、古しへの人に似て、家の屋根さへ繕らふを得ざれば、まして羊の小舍は、度々羊を漏して、止むるを得ず。出でたる羊は、平素の飢を一日に取り返へさんと、競ひ老人の麥畑を食ひ荒れけり。八造の羊は、アンゴラ種とて、毛の長く、猛悍なる性

なりければ、弱き垣は破りもすべく、低き壁は飛び越へもすべし。まして一度出でたるその時は、忽にして數步の畑は食ひ荒し、蹈み荒らして、亂暴甚だしければ、一度ならず、二度ならず、老人は八造に掛け合ひたり。八造元より好んで出すにあらざれば、破れたる垣に、竹をたしてつくろひ、繩の切を以て、羊の足を括りて出でざらんヿを勉むれども、活潑なる羊共、何とか思ふべき。括られたる日の夕方は繩を切り、翌日の朝は垣を破りて、又たも隣りの厄介となる。老人此の度は、杖を携へて、自ら見張に出で掛け、隣の羊の來る度毎に、頭足のきらひなく打ちこらしめて、追ひ返せるに、或る日、親戚に招かれて、家内一同、外出しける留守に、又た〳〵羊に襲われて、折角恃みたる今年の收獲の多分を荒らされたり。氣短の老人いかで默して居らるべき、忽ち顏を火の如く赤らめ、下男に命じて、大なる犬を求め來らしめ、羊を見次第噛み付くヿを敎へしめ、一方には己れと下男と、鐵砲を持ちて見張に出で、見付け次第に打ち殺ろさんと計れり。其日は羊も出でずして暮れけるが、夜に至り、靜かに思ひめぐらすに、八造は元と惡意ありて爲せし業にあらず、殊に家も貧しければ、羊を失なひては忽ち生活の術も失なわん。それに引き更え余は數町の田地もあり、家もあり、山もあり、少しの畑を荒されたりとも、さしむき困るにもあらざれば、何か明法はなきものにやと種々考へし後、一つの明案を考へ出せり。

さて夜も明けゝれば、早速八造の家に行き『八造さんお早う』と云ひけれども、八造は後に向きて何か爲しつゝありしが、知らぬ顏して更らに答へず。老人は少しく近かよりて『今日はよいお天氣で御ざいます』と云ひければ八造僅かに頭を下げて答禮せしのみにて、此處を見向きもせざりければ、老人は更らに近かよりて『余は今日はお內の羊の事で參りました』と云ひけ

るに、八造打たれたる如き心臓の鼓動を表てに表らわしつゝ、くわつと怒りて此處にふり向き『羊を殺したくばお殺しください』と云ひて、後は口の中にて不親切なる隣り人よ、人に慈みを施す心はなくて、反て貧民を困しめんとは、一昨日鐵砲を以て垣のすきよりねらひ居たる邪慳の相は、そのまゝ顔に顯われたり。死しても忘れわせじ、不親切者よ／＼と言葉きれ／＼に獨言ちけり。老人は言葉の終るを待ち、落ち付きて云ひける樣『本にお前の言ふ通り私は悪るい隣人でしたが、私が昨夜善い法方を考へた、今日からはお前の羊を私の牧場へ入れてもよいよ。私の牧場はどうせ明いて居るからね。勿論損料等は少しも入らぬよと顏を柔らげて云ひければ、八造持ちたる鎌を手より落しぼんやりとして、老人の顏を眺め居たり、暫くして云ひけるは『御隱居樣ゆるして下ださい以後は羊めに確かりと足かせをはめてやります、もし出たら其時こそ私が鐵砲で打つてやります、決して／＼あなた樣の御厄介はかけません、一足も他の土地は踏ませません』とさん／＼にわびて互に快よく分かれしと云ふ。これは我等が毎日を過ごす内幾度か腹の立つとあり、其時怒りてしまへば、互ひに腹も立ち、後ち／＼迄も心おしきものなり、一時の忍び難き情をくひしめて、ならぬ堪耐もする時は、短氣の損を爲すとなくして、反ていつ迄も快くして安心を買ひ求むるを得べし。且つ又た一時の怒りに任せてやり過ごす時は、罪のなき者に迄禍を及ぼし、不德義に落るとあり。

書物及書物取扱規則（つゞき）

（十八）濕り又は汚れたる手を以て書物を取扱ふとと勿れ。

（十九）大なる書冊はテーブルの上に見るべし。

(二十) 食指又は中指を以て上邊よりページを開く勿れ。

(二十一) 書棚より書冊を引出すに上邊を以てする勿れ。

(二十二) 濕ある布帛又はスポンヂを觸るゝ勿れ。

(二十三) 開かれたる書物の上に他の書物及他の品物を載する勿れ。

(二十四) 書物に塵埃を襲らせ置くは惡し、必らず乾きたる柔軟の布帛か拂子かにて拂ひ去るべし。

(二十五) 書物の間には鉛筆又は紙束又は其他の者を挿む勿れ。

(二十六) 書物を開くに表紙の兩側が平均にするやうにすべし(一方の表紙かピンと刎上かる如きは書物を損傷するの恐あり)

(二十七) 書物を開くるに常に中央よりすべし、決して其端又は表紙の一方より試むべからず。

(二十八) 書物を完全に保存せんとならば文學書には鉛筆の點を附す勿れ。

(二十九) 小兒等の手に觸れざる清淨にして濕氣なき所に保存すべし。

(三十) 殊に他より借用の書は清潔なる場所に置きて汚穢を防ぐべし。

(三十一) 若し書物か濕氣を受けたるあるも、火に焙りて乾すは宜しからす、濕りなき柔かき布帛を以て拭ひ去るべし。

(三十二) 書物の上に紙を載せて文字などを書くべからず、鉛筆やペンにてページを掩き或は傷ることあり

(三十三) 借りたる書物は速に讀みて返すべし、決して先方に迷惑を掛くる勿れ

(三十四) 鋭利なる刄物を以て書物のページを裁つことを勿れ、其は屢々刄のそれて文字の所に及ぶこ

とあり、又指を以て切るも宜しからず、紙切か通常のテーブル、ナイフを用ゐて宜し

(三十五)小冊子を取扱ふには食指、中指、無名指を書背にかけ拇指と小指とによりて取扱ふべし

(完)

手藝案內

レース編

本雜誌にはレース編の事を一回も記載したる事なかりき、蓋しレース編は我邦に多く行はれず、需用狹きが故に東京府士族授產場に於て月謝一圓を以てレース編を敎え且つ其製作品を販賣したれども外國品に壓せられ、遂に授產場は廢止に歸したり、然れどもレースは當世には需用尠なしと雖も、將來は必らず我國に於ても需用多からんと信ず、レース編は洋風の家、洋裝の人には最も必要なるものにして窓掛、テーブル飾、帽子、巾着其他衣服附屬品に是非とも欠くべからざるものなり、又女子手藝中屈指の上品にして美術に富む職業なれば、目下販賣上に需用なきも(素より販賣上に需用ありと雖も價格の點に於て舶來品に壓せらるゝを以て彼に競爭すること能はず)家々にて暇ある人には此手藝を試み自家の用料と爲すも可なり、さればこれより時々挿圖を加えてレース編の案內を爲すべし。

靴襪編

目下近年に稀なる大暑大熱殆んど苦悶苦死の境に瀕するが如く皆海邊、温泉、山中に去りて各々消夏の法を講す、然れども家に在りて何か少し勞働をするも亦以て夏を消するに足らんか、又天の雨ふらざる前に其牖戶を綢繆すとあり來る十月ともならば早や冬の時代となれば、今よりソロ〳〵冬の仕度にかゝるも決して大早計の業にあらず、素より仕度と申せども、直ぐに購

求し得又は製作し得らるゝものなれば今日よりは少しく早手廻りなれども、毛絲編の如きは兎に角時間を要するものなれば毛絲編の心得ある人は午睡の暇を此事に消し玉へよ、今茲に長靴襪の編方を乘すべし、(但し長靴襪は大抵小兒の用なれば出來上は一尺一寸二三分にして七文より八文位なり、これを編むには針編を用ゆ)先づ口編を始め糸數七十二本を機り、右と左へ二寸編み又たひらに編むこと二寸なる後編目一個を減し五回程編み行き又編目を減し又五回程編み行くなり、斯くすること十二回にして糸六十殘るに至れば丈一尺に及ぶ、此處より踵となるべければ二つに別けて編み往く、一寸二分程も編みたらば之を半分わかち之より二寸程編みて一個を減じ、これより半面に編み行く其のちは右よりも左よりも糸十八殘るまで減じ行く其後右にて十二を拾ひ前向は眞直にあみ又た左にも十二を拾ふべし、一本の針に二十一宛編みたる後たひらに二回編み、踵の三角形の左右にて一つゝ減じ又二回たひらに編む、斯くする事六回程にして終る横の針十五宛となる其後たひらに三寸編み一回には八づゝ減じ上下とも四處各々減ずるなり、減じ方は一つを針に取りをき又一つを他の針に拔き取りをきて前に取りし一を戻し、底にて一つを減じ、又他の針を戻して一つ所にて二つを減じ、右も左も同じやうにすること五回になれば糸數上下にて二十殘る夫を角止にすれば出來上りたるものなり。

養蠶術(つゞき)

今號に少しく生糸の術を記して茲に局を結ぶべし。

製糸法――製糸するには繭の煮えし鍋の湯面に浮べるものを搔き廻して糸口を求め、五個位の糸纏を一纏になし枠に卷き取ると知るべし。繭を煮るには松葉、麥稈、豆殼等の如き燃売の飛散するの恐あるものは一切禁するを可なりとす。毎朝寢を出づれば鍋中の水を沸

膨せしめ凡そ三十分間許水に浸せる繭を其の中に投入し、煮る事大凡十四五分なれば繭の皮肉煮え湯を含み少しく透明躰となり飴色を呈するに至らば焚火を止め火のみを殘して湯を冷ざらしめ、長六寸許の小箒（篠竹にても宜し）を以て浮べる煮繭を前方より前へ幾度か掻き廻せば、繭の糸口は直ぐに箒にかゝるなり、此の糸口を一纒に持ち上げ糸（雪片糸）を引出し節なき善良糸の出づるに至りて之を絶つ、此の引出したる雪片糸を熨斗糸と稱し太織紬の原料となるものなり。

糸の着法——二大別あり、機械製糸の着法と坐繰製糸の着法なり、前者は投げつけといひ後者は手操着ともいふ、普通に行はるゝ着法は食指の中程に於て拇指の爪にて糸端を切り捨て、一は糸口を拇指に支へて着け一は糸口を食指の外方に支へて着くるなり。

纏類——生絲に製する通常の繭より取るものは五纏、鐵炮糸、提糸、玉糸すべき玉繭（蠶兒二頭にて結繭せしもの）は十纏を定則とす。

困難なるもの——解舒し難きもの又は解舒しすべしと雖も節多くして折返又は提糸に繰り能はざるものならば仙上ぐべし、之を上り繭と稱す、

生皮苧——何の繭も繰りて止まざれば終には解舒し盡くし得ると雖も、繭皮の裏面則ち最後の裏面即ち最後に吐糸せるものは最初に吐出せる雪片糸と共に殊に纎細にして錯雜不理の皮層をなし切斷し易くして糸に繰り難く且つ良糸に非ざるが故に此に最早繰るを止め、鍋中より蛹を出し去りて簾の如き者に打附け乾かすべし、これ即ち生皮苧なり、生皮苧を壁に打着くるは宜しからず。

製糸用水——最も心を用ゆべき事なり、清水にあらざれば糸に光澤を増す能はず、清水を用ゆるが上にも尚ほ湯水を可成的多くして度々取更ゆるを宜しとす、決して鑛物質を含有する水を用ゆべからず、若し鑛物質

の溶解せる事少なき水を得る能はざる時は、一度沸騰せしめて炭酸加里、炭酸石灰等を沈澱せしめ其水を用ゆるを可とす。

紬糸製法――紬即ち銘仙糸の製糸法は眞綿を裁縫用の絆臺の如きものにかけ、左指にて延き出たし、恰も右指に唾液をつけ撚るが如くすごく、若し唾液を着けざる時は糸の如く固着せずして綿のまゝにて細長くなる又すごけるものは笊に入れ後ち糸車にて撚をかくること恰も漁網を結ぶ麻糸を撚るが如くすべし、但し緯糸とすべきものは撚るに及ばざるなり。

工女――上手なる工女は一日の繰量多くして一升の糸量を多く出だし且つ上等の糸を製すると雖も其拙劣なる工女は全く之に反す故に工女を雇はんとならば上手なるを撰むべし、拙劣のものは賃錢廉と雖も上手なる工女に比しては甚だ不經濟なり。

生糸の種類――絹繭より繰るを折返糸若しくば捻糸とし絹繭より繰りて太きもの及死籠繭赤繭より繰るものを提糸若しくば鐵砲糸とし玉繭より繰るものを玉糸一名節糸とし、薄皮繭より繰るものを屑糸とす、屑糸は大低自家用料とす、出殼繭は眞綿に製せられ、大織糸は大織紬を製し、本生糸則ち折返糸、捻糸は「ハンケチ」羽織等を織り、提糸又は鐵砲糸は絹、糸織等を織る、玉繭は節糸織等を織る用に供す、紬は則ち錦綿より織るものと知るべし。

製糸の仕上法――種々あり先づ折返法（四つに折返したるもの）捻造（捻りたるもの）提造（提け得らるゝやうにしたるもの）鐵砲造（鐵砲形にしたるもの）島田造（島田形にしたるもの）等なり、併しこれは國々の仕上法を代表したるものにして此法に限たりと思ふべからず。

蛹の利用及眞綿の製法――已に糸を繰り終り生皮苧を取り了はれば殘るものは蛹なり、蛹は穀菜桑樹の肥料

となる、肥料と爲すには干して臼に入れ靜かに磨り潰して又は粉末として用ゆ。眞綿に製する繭は玉繭、出売繭及其他の屑繭、中揚り繭と稱して糸口繰る能はざるものを用ゆ、其製法は灰汁にて二三時間繭を煮其煮汁を去り尚ほ清水にて洗ひ濯きて清水の濁らぬまでに至らしめ、水中より一個つゝ拾ひ出し、兩指にて少しく壓し水の出づる穴を發見し此穴より繭を扯裂して一定の大さに厚薄なきやうに引延ばすべし、引延ばす法は穴を少しく大ならしめ拇指を除き兩手の四指を穴に挿入して左右に引延ばし、一邊の一兩端を眞綿枠にかけ尚ほ引延ばして其下の枠にかくべし、眞綿枠の事は人の知る所なれば解説を要せず、又種々記すべき事あれども省略し、玆に結尾を告ぐ。（完）



社交一斑

流行の漆

春夢

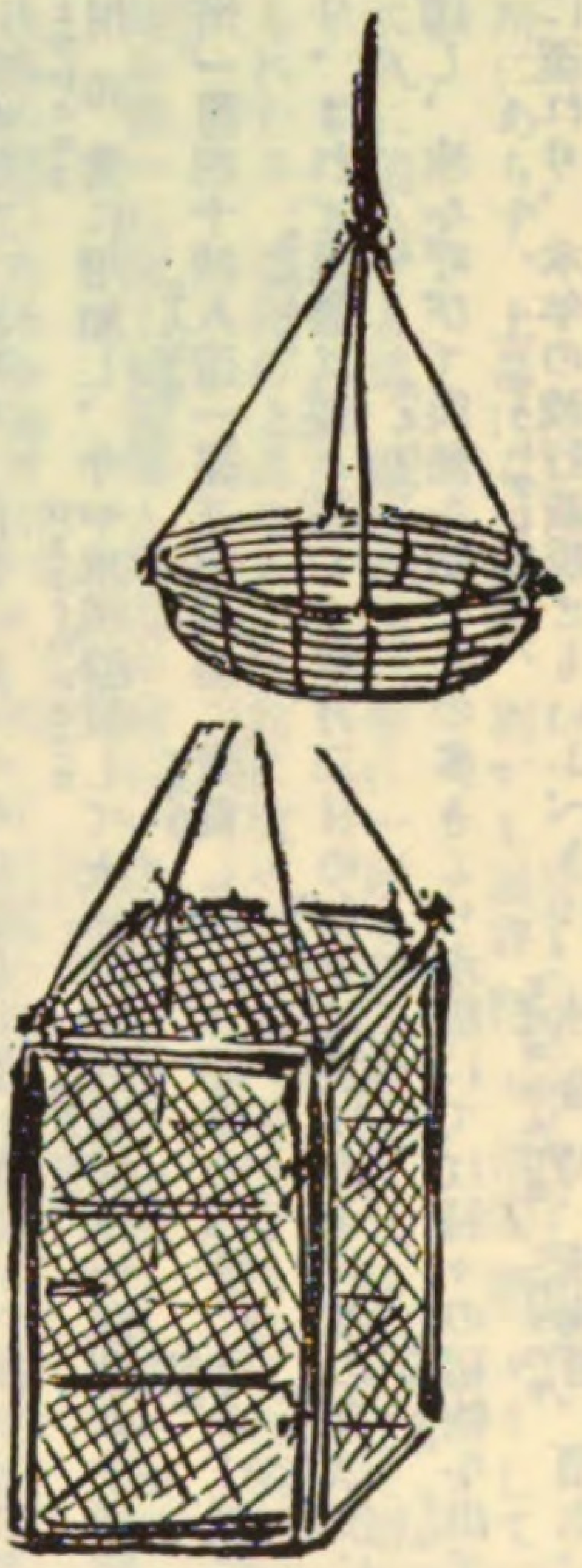
流行の塗色

膳、椀、盆、箱の如き日用什器さ鏡臺、花瓶臺、机、硯箱の如き家內裝飾品中如何なる塗色が最も流行するかさいふに膳の如き又は椀の外面又は硯箱、名刺箱、煙盞の如き大低臘色を好むが如し、梨地の如きは頗る衰退せり、模樣は金蒔繪（高蒔繪、平蒔繪）を施し目出たきものさ花鳥風月さいふよりも、秋野の七草や垣根の夕顔の如き可憐なるものを描き、重箱又は香箱の如きものに至りては源氏模樣を置くものを多く見受らる、若し丈夫向なる流行品を何ぞさ問はヾ例の會津塗なり會津塗は俗に馬鹿さ申す位にして馬鹿に剝落せざる所を珍重す、會津塗にも種々あれども、近來漆工大に發達し上々の美術品を出すに至り、又會津塗の中に金蒔繪を加へて益々其美術を精巧ならしむ、此塗は丈夫なるものなれば以何なる什器にも適用し得べしさ雖も、箸、膳、椀、硯箱、

廣蓋等に最も妙なり、價も差して上らず、若し近頃の大流行といふべきは琉球朱塗なり、これは直段の廉なる爲めに流行の勢力を有するに至りしやは知らざれども、硯箱なり膳、椀、鉢、壺、盃、臺に至るまで此塗を用ゆる家もあり、然しながら朱塗の古雅にして上品なるは紀伊洗朱塗に勝るべくもあらず、朱塗にて上乘なるは紀伊洗朱塗に及ぶものあらざるべし、殊に金具附の硯箱の如きは古雅掬するに堪ゆべき什あり、價は勿論琉球塗の二倍なりと知るべし。

涼し棚

昨今の如き大暑は近年實に比類を見ず日々九十度以上に上り都下百萬の人衆は正に熱死せんとす、隨て食物の腐敗も早く朝炊きし飯が夜に至れば一種の臭氣を發するに至り、其他の煮焚物も直ぐに腐敗す、三度々々飯を炊くは到底手數と時間の許す所にあらず、又三度々々熱いものと來



ては此炎威内外の熱迫に遇ひ到底堪ゆべきものならず、されば何處の家にても食物の腐敗せぬやうにするは家を持つものゝ專務なれば、お鉢を涼しき所に置き、或は長き糸に吊して井戸の中に冷し置くもあれども斯樣にしたるものは却つて直ぐに腐敗す、故に飯等は笊に入れて涼しき所に置き上に紗製の蓋（一二錢に購ひ得らる）を會し置くに如くはなし又露物の如きは笊に入れ置くべからず勢ひ丼、鉢の如きものに入れて上に蓋をせされば蠅の群集する恐あり、圖によりて示すものは涼し棚にして東京の家庭にては大抵此器を用ゆ、角形なるものは四方の框を木製にて組み、四方を少さみ銅線の網又は紗にて張る（銅線にて張りたるものは價貴く、紗は其半價に至らず）其中には二段三段の棚を設け、皿物、鉢物の如きものを挿置するに便にす、此器は隨分風通し能きものなれば風通し能き室内に吊し置く時は、假令糊の如き柔き飯にても今朝炊きたるものが翌日までは必らず安全なりと聞けり、別圖は銅線もて器用に製したるものをして涼し棚の代用を爲し、價は最も廉なるものなれども形の大なる鉢、皿等を澤山に入れ置くに便ならず、これも天井に吊し置く器なり、「鼠いらず」と稱する戸棚も、夏には成るべく廣き銅線の網狀戸か透戸を撰むが好し。

流行の飲物

は言を俟たず氷なり、前記の如く今年の炎暑は實に格別にて隨て氷の需用非常に増加し、今や氷塊騰貴して大栢塲千斤函館氷一圓五六十錢野州一圓四十錢人造一圓三十錢迄に騰貴し殆んど昨年の三倍に登るに至れり、されど炎暑は益々甚しく本月三日の如きは實に九十八度の高溫度に達し、氷を呼びて炎熱を防ぐもの多きより氷屋にては種々の種物を出すに至れり、本年の流行新規ともいふべきは、氷金時、氷海苔、櫻水、橘水、生姜水、亞米利加水、其平民的に至りては一杯五厘の蜜柑水、蒸溜水、ラムネ水大繁昌なり、併し水、氷は餘り衛生に宜しきものにあらざれば飲を過して下痢を起すこと勿れ。

軍人用手巾

日清交渉事件起りてより東京軍人間に流行するは麻の夏用「ハンカチーフ」にして其面に日本兵士が銃劔を揮ひ豚尾漢に擬したる慈姑を三つ四つ芋刺にし、アナタコナタには慈姑の首玉算を亂して散亂しある摸樣を描きあり時節柄一見敵愾心を奮起せしむる流行品なり。

牡丹と菊

流行社會にも政治又は戰爭社會に於けるが如く覇權を把握する勢力者あり、流行は千態萬狀實に極りなしと雖も、其中の勢力者を探ぐるに直ちに其二三を屈指し得べし、譬へば派手なるものが流行する時は、衣服に於ても髮具に於ても指輪、手袋、靴、駒下駄に至る迄凡て派手ならざるはなし、又地味なる時に於ても淡泊なる時に於ても且然り、必らず流行社會を一貫する覇權者なるものあるなり、而して現今の流行社會には如何なるものが其帝王の位置にあり、如何なるものが其覇權を握れるかと問ばゝ、其流行摸樣に於ては牡丹と菊が非常なる勢力を以て流行社會に威權を振ひつゝありと答辯するに躊躇する所なし（色の流行は他日記すべし）、試に見よ、人の裝飾品に如何に多くの牡丹の名あるを、玆に重なる流行品を擧げて其事實を證せば先づ婦人の裝飾品たる白粉には白牡丹、牡丹香等あり、水白粉には牡丹精、牡丹水等あり、帶止にも牡丹締、牡丹止等あり、齒磨にも牡丹散、牡丹香等あり、丸髷にも牡丹形あり、俳優にもぼたんあり、履物にも一時牡丹形なる女駒下駄を唱き及べり、これは其名稱のみならず單衣、浴衣、帷子（女用）は申すまでもなく、手拭の摸樣にても、團扇の摸樣にても、縮珍、博多の女帶摸樣にても、少娘の花簪も四時を嫌はず牡丹を用ゐ、平打の簪にもお初形の櫛にても笄にても牡丹摸樣を用ゐるが、他の摸樣にてもヲザとつまみ牡丹か崩牡丹に摸樣を變ゆる事甚だ流行す、菊摸樣も亦然り衣類に菊が專有權を有するは言を俟たず、裝飾品中菊の名稱あるは一々數

ふろに過あらず、其一例を擧ぐれば菊の宴、菊の香、幾久園、千代菊、江戸菊(白粉)、菊の露、菊水(香水)菊結び(帶メ)等菊摸様の流行區域の廣潤なること牡丹と甲乙あらず、殊に裝具に於ては牡丹を凌駕するの勢力を有し、古代菊、眞向菊、亂菊、野菊の流行摸様は春夏秋冬休する所を知らず、これは菊は牡丹よりも摸様小にして裝具の如き瑣物に好適するを以てならん、牡丹と菊との大流行の勢力あるは玆に余が説明を俟たずとも少しく裝飾品に心を止むる婦人は余が言の虚ならざるを知らるべし、又牡丹と菊と流行するを知らんとならば、往來の人に目を着くれば直ぐに合點が出來るなり、これより如何なれば牡丹と菊とが流行社會に勢力を振ふかを觀察すべし。

(第一)花の上品なる事　牡丹及び菊の流行社會に勢功を有する第一要素は花が上品なる所にありて決して華美なる所にあらず、勿論牡丹の如きは國色婉容人を媚殺すといへども其の人を媚殺する所は牡丹花の華美なる所にあらず、上品にして優緩、而かも溫容裕々淸姿嫋々として猥に人に迫らざる處、僅に草花社會に一頭を抜き唐土にては花の王と尊められたる、菊花の上品なる事は玆に改めて分解するまでもなく四君子中指を第一に屈し陶淵明も野徑の菊に一生を托したるを見ても菊が如何に上品の地にあるを知りつべし、而して花壇の花ともなるべきものは百花千草中僅かに牡丹と菊を撰ぶのみ、菖蒲杜若の艶と雖も小溝の流に束の間の全盛を誇り七草は哀を秋の野面に殘すにあらずや。

(第二)花形の正確なる事　牡丹と菊とは最も花形正確にして花瓣又は心蕋は左右前後不同なく又横より見るも竪てより見るも表より見るも裏より見るも牡丹又は菊たる本色を失はずこれ二品が百花の上に立つ所以なり。

(第三)變化ある事　變化ありと言へば紫陽花の如きは七變八化するものなれば此に上越すものなきやうなれども、それは色の變化なり、花壇菊に花の變化則ち千變萬化の「くるひ」あり、花壇牡丹に花瓣の開閉ある如きもの他に見ず、故に眞向、横向、裏種々様々に變り摸様を爲すも牡丹又は菊花たるを失はず又小にしても大にして適用するも矢張牡丹又は菊花たるを失はず、譬へば裕衣一枚に一點の摘牡丹若しくは亂菊を置くも花は花として受取られども、他の花にてはさうは參らず、若し朝顔を尺餘の大となし、梅の花を尺徑となすは甚だ眞實を誤る又牡丹、菊を小にしても矢張其花として見ることを得るなり。

(第四)名稱の呼び易き事　物の流行には其物の名稱大に關係を有す、譬へば煙草社會に「カメチ」の如き「ピンヘツト」の如き名稱の呼び易きものが流行を先んじ、「ハイレート」又は「フリシユラ」の如き名稱の呼び苦

きものが前者に一籌を輸するが如く、「ぼたん」又は「きく」の名が「うめ」「さくら」「山吹」「ふじ」等よりも呼び易き名稱なるを知るべし。

(第五)或社會の嗜好を學ぶ事　漸行は必らず或一部の重なるものゝ嗜好を追ふものなり、譬へばナポレオンが頭部の銃傷を蔽はんが爲に左分を爲したるを見て忽ち「ナポレオン」と稱する髮風行はれたるが如く、殊に俳優、藝妓等の顰を學んで遂に流行を極むることあり、牡丹の流行の如きは成田屋(市川團十郎)代々の嗜好にして殊に當代は甚だ之を嗜むに基因するもの多からん、然しながら凡ての人悉く團十郎の嗜好を學びて今日の大勢力に至りしとはいはず、其流行の如何を知らずして流行の波に乗せられたるもの蓋し其の多數に居るべし、譬ば禁酒家が一般の流行なりとて猩々圖の軸物を床にかけ又は非演劇の婦女が偶然に三升模樣の帶を締むるが如し、殊に「ぼたん」の如きは俳優社會の嗜好なるを以て今日の勢力を見るに至りたるなるべし、蔦の流行せざるは未だ左團次に團十郎程の人氣なければなり、裏梅の流行せざるは未だ中村福助に團十郎程の人氣なければなり、菊の流行の如きは「ぼたん」程俳優の人氣を受けずと雖も尙ほ菊五郎の名に因あり、又菊花の如き雲上の御紋なれば巧猾なる商人は十六菊に紛はしき菊模樣を出せし程菊は流行の全盛を極め居れり。

洋服附屬品二種

近頃西洋人や一寸通り抜けた洋裝家を見るに昨今の酷暑の候なれば短衣を着るもの稀にして多くは縮又は麻の紐附襦袢を着るのみ、短衣を用ゆるものは大抵白の「リチン」を着す、而して「ヅボン」釣は甚だ窮屈千萬なり締帶を用ゆれば甚だ兵士か下等職人らしく、爰に於て一種の帶の流行を見る、其は白縮緬か水色縮緬などくる〳〵と腰に卷きつくる風俗なり、善か惡か知られども「ヅボン」釣の如き若しくは締帶の如き無風流なるものにあらず、流行の起原は昨年頃より上海在留の西洋人が洒落に用ゐ始め今年は稍其流行の勢力を増したるが如し、此帶なれなば旅行等をして湯後の帶に事を欠く事なかるべし、今一つの流行は木綿にて「レース」編にしたる「ネツク、タイ」(襟飾)なり少しく厚ぼつたきも高雅瀟洒たるに至りては夏向流行品とするに足る、巾一寸五分許の一條を結ぶやうにす、未だ流行の勢力を來たすとゝ申せど將來面白き傾向あり。

貴族的團扇

上流社會は追々花香風流に流れ普通の團扇にては餘り粗末にもあり殊に夏季室内飾の爲め近來は越前製絹張團扇花鳥縫取圖が流行す其相場を聞くに上等一本に付六十錢直徑八寸もの同四十錢、同七寸三十五錢な

りさ先づ〳〵こんなものは中以下には不用なり

日用品物價（八月六日）

◎白米（一圓に付）●一等白米七舛〇〇●二等白米七舛二合●三等白米七舛六合●四等白米八舛〇〇●五等白米八舛三合

◎雜穀（一圓に付）●南京大豆一斗九升●同靑大豆一斗六升七合●同薄色小豆一斗四升三合●同白小豆一斗四升●八戸大豆一斗九升●紺璧薄色小豆一斗二升●室蘭黑豆一斗九升五合●目無白さ一斗二升五合●本石上大豆一斗八升五合●南部大豆一斗九升●新川越豌豆一斗六升

◎鹽（一圓に付）●赤穗四俵一分●大鹽幷に八家四俵二分●本齋六俵四分五厘●新齋六俵九分

◎種油（一圓に付）●荏油十六圓七十錢●地水九圓十錢●胡麻十三圓也●桐八圓也●いせ箱詰九圓七十五錢●一川九圓九十錢●イ九圓八十七錢●久ト九圓八十八錢●星印九圓九十五錢●非桁九圓八十八錢●入山九圓九十五錢●チヤスタ一圓七十七錢●タンソ一圓六十九錢●ホーキ一圓七十七錢

◎走り果物の相場　果物も旱りの爲め總体に不作の方にして中にも本年の梨子は近年稀なる大外れにて非常の不作なり目下下總、大師河原邊より粗惡の品出荷す其種類は眞鍮、赤龍なりさ頗ろ不味にして三個一錢位西洋葡萄即今出荷す甚だ澁くして不味なり一〆目入一箱廿五錢より卅錢位地葡萄は來月上旬甲州本場は來月中旬位には出荷すべし苹果は本年豐作の方にて重に奥州筋信州等より上物出荷す在來の西瓜は下總より重に出荷す價上等一個十四五錢より下等四錢位迄あり西洋西瓜は目黑在川崎在より出荷す一個二十錢內外マクア瓜は旱りの爲め季節を早め目下既に盛りを過ぎたり上等一個一錢三四厘より下等四五厘桃は外れの方にて矢張旱りのため虫付き多く密柑箱入上五十錢下十二錢位なり

雜　錄

家族の任務（ルイーズ）

無一生

某外國にルイーズとなん呼へる娘ありけるが抑も此ルイーズと云へるは如何なる善き月日の下に生れしにや其縹緻と云ひ敎育と云ひ殊には財産家の一人娘と云ひ何一つ足らはぬとなき世にも幸多き娘にてありしが昨日と送り今日と過ぎ今歲二十の春を迎へしが早やルイーズには去る然るべき一人の若殿原と結婚の約束整ひて先方で慕へば此方でも亦憎くからず相互に思ひ思は

る、寔に相應はしき妹脊の緣と知られける月に叢雲花に嵐滿れば缺る世の習ひルイーズの父親は一朝不意なくも盲目の身となりしがルイーズは屹度心に思案を定め對手の若殿原の悲痛や切なる願望亦父親の懇ろなる說諭あるにも拘はらず直ちに先方へ結婚の破談を申込みつ夫れより以後はルイーズは浮世の有らゆる娛樂に遠ざかりて只一向に父親を慰め其東道者を以て自個の任務となし而して世を送らんと欲せり

去程にルイーズは片時も盲人の傍を去らざりしが父の倦厭を來さんとを恐れ萬快活に賑々敷振舞ひ亦は面白き談話拵して父を慰めんと努め父親が外に出でんとするときにはルイーズは父親に向ひ「父上よ外に出給はんとならば妾に倚掛りて來給へかし」と言ひて父親を扶けて庭園を漫步きし或は亦郊外に導き往きて新鮮の空氣を呼吸せしめぬ

斯くて外より家に歸へればルイーズは物の本を讀み聽かせ或は唱歌を爲し或は音樂を奏し拵して父親を慰め亦時々は事物の道理を辨へたる優しき人々を吾家に集へ父の言葉敵として之を慰め或は亦善き親き舊友の許に導き往きて愉快なる宵を過ごしたる後ち吾家に伴還へりけるがルイーズが其以前嗜める祝事や娛樂の席に出よと誘引に來る者あるときは「折角の御思召には候へども若し妾が出往きたらんには誰か父の對手となり申すべき」と答へて父親の傍を離れざりし總じて吾娘の斯る柔和にして巧みなる介抱に由りて盲人は束の間も決して退屈と云ふとを感ぜざりき

谷村計介

（口繪の繪解き）

西南戰亂の日に名高き美談なりしは、谷村計介が事なりき。

計介は日向の人、年壯にして徵されて熊本鎭臺に入り歩兵となれり。佐賀の亂に戰功ありて陸軍伍長となり、臺灣の役にも勇名を顯したり。

明治十年西郷隆盛兵を擧げて、大軍潮の如く熊本城を圍むや、守將陸軍少將谷干城守禦の方畧を征討總督の宮に報ぜんとす、而して計介命を請けて之が使者たり。

彼は身に煤煙を塗り、襤褸を着け、非人の裝をなしつゝ夜に乘じて城を出で、間道より走りたりしが、遂に敵兵の爲に縛せられぬ。

敵兵嚴しく拷問したるに毫も屈する所なく、僞て怯懦の狀を示し、一夜守兵の眠れるを窺ひ、縄を切りて逃げ去れり。

斯くて彼は夜行き晝寢ね、吉次山中に至りて再び捕はれしに、又もや間を窺ひて遁れ、遂に第一師團の本營に達し、陸軍少將野津鎭雄を見て、使命を傳へ、且つ城兵苦戰の狀を説けり。悲壯慷慨坐客皆淚を掩ふ。

野津少將は厚く慰勞して之を休息せしめしに、江原坂の戰方に急にして、固く請て戰隊に加はり、傳令の事を命ぜられしが、味方利あらずして壘を失はんとするや、彼奮激に堪ず、他人の銃を奪ひ單身叱咤して進み、敵營に突入して勇戰健鬪し、遂に銃丸に中りて斃れぬ、年二十有五。聞くもの歎惜せざるはなかりき。」

春風秋雨十七年、今は九段坂上靖國祠の傍『軍人龜鑑之碑』ありて其義烈を記臆せらるゝのみ。

時事一斑

此の科學者

科學界の戰勝者北里柴三郎氏は黒死病のマンマパチルスを擒にし、七月三十日凱旋して京に入れり。

吾人は滿腔の喜を以て發明の餘惠を世界に布かんとす

る此の科學者の歸るを迎へ、又滿腔の熱情を以て國民の光榮たる此の科學者の健全を祝す。

憶起するは

北里氏の歸朝を見て直ちに憶起するは青山石神二氏の事なり。

唯喜ぶ、石神氏は已に八月三日に歸途に上り、青山氏二十日頃を以て歸途に就かんとすとの報なることを。

吾人が二氏を迎ふるも恐らくは遠きにあらざるべし。

黑死病の傳染する場合

北里博士は發明の結果として、黑死病傳染に關する場合の三個を認めたりと云ふ。

第一、バチルスは呼吸によりて躰内に入るべし。

第二、血液の注射に由り、又は身躰の傷口より躰内に入るべし。

第三、バチルスは食物と共に躰内に入るべし(此事は調査猶不充分)。

社會下層に及ぶ文明の光

七月廿五日簡易農學校規程公にせられ、農業に於ける働手の上に農學智識は弘布せられんとせり。

同時に徒弟學校規程は定められて、職工教育亦施さるべくなれり。

喜ぶべきは、文明の光の漸く社會下層に及ぶとなり、漸く廣くなり、漸く實用的になれることとなり。

婦人の教育者

明治廿五年末に於ける婦人にして教育の事を執るもの、實に下の如し。

幼稚園保姆	小學教師	高等小學校教師	師範學校教師	専門學校及各種學校教師	合計
三五七	三四〇一	一九七	六二	六二二	四六三九

而して其内官立公立の學校に教師たるもの三千六百四十五人、私立學校に教師たるもの九百九十四人なり。

吾人は其如何に好良に成功するかを待つべし。

小學教授

明治廿四年十一月の學級編制法改正より、多くの小學校は單級敎授（全學校の生徒を一學級とするもの）の方針を取ることゝなりしが、大日本敎育會に於て研究したる單級學校と多級學校（こゝにては三學級以上のものを指す）との利害比較成績は下の如しとなり。

第一、訓練上の事につきては、

一、統一　單級學校を便とす

二、生徒の性質の觀察　敎師一人の受持つ生徒數少なきを以て多級學校を便とす。

三、生徒の依賴心　は單級學校の方生じ易からず。

四、生徒の自治心　單級學校の方生じ易からず。

五、生徒の協同心　單級學校の方生じ易し。

六、生徒の親睦の情　同上。

七、敎師と生徒との情誼　同上。

八、生徒の從順性　同上。

第二、敎授上の事につきては、

一、學力の進步　多級學校を便とす。

二、生徒の心力の觀察　同上。

三、敎授の統一　單級學校を便とす。

四、敎授の聯絡　同上、

五、敎授の變化　多級學校を便とす。

第三、管理上の事につきては、單級學校を困難とす。但し管理の統一は多級學校亦困難なり。

第四、敎師の勞力は、單級學校を多しとす。

第五、經費は、單級學校を少しとす。

而して之が研究者は其意見を報告して曰へり、未熟の敎師數人にて多級敎授をなさんよりは、老練なる敎師一人にて單級學校をなすを以て勝れりとすと。

都會の兒童と田舍の兒童

都會の兒童と田舍の兒童とを比較したるもの或る雜誌に見ゆ。曰く、

（都會の兒童）　（田舍の兒童）

男女の關係親密なり	男女の關係親密ならず
多言	寡言
人に狎る	人を恐る
活潑にして粗暴に傾き	温順にして卑屈に傾く
清潔を愛す	清潔を愛するもの少し
敎師を信ずると淺し	敎師を信ずると深し
授業時間と休憩時間の區別を知る	授業時間非授業時間を知らず
見物に冷淡なり	芝居神樂其他見物を好むと甚し
理科の思想に富む	習字讀者に長ず
遠足旅行を好む	遠足旅行を嫌ふ
過をなして謝すると早く而して再過をなすとも亦早し	過を謝すると遲く而して過をなすとも亦少し
約束を守ると少し	堅く約束を守る
大抵下讀復習す	下讀復習をなすもの少し
浪費をなすと多く	浪費をなすと少し
變化を好むと甚し	變化を好むと甚しからず
學問を以て世を渡るとを欲す	實業を以て世を渡るを望む
欠席少し	欠席多し
女子にして學術を修めんとするもの多し	女子にして學術を修めんとするもの少し
唱歌を好むもの多し	唱歌を好まぬもの多し
小食にして數回食ふ	大食にして食時の數回前者より少なし
衣服其他の裝飾物の色彩淡泊なるを愛す	色彩の濃厚なるものを愛す
朝寢をなすもの多し	朝起するもの多し
獨立心に富む	依賴心多し

世の兒子を敎養するもの、大に參照する所ありて可なり。

日本正敎會

云ふものあり、日本正敎會は近來進步の兆候を顯はし來れりと。其發兌する所の「正敎新報」の如き、「心海」

の如き、婦人雜誌として「裏錦」の如き、皆一種の活氣あるを觀れば、吾人は其言の眞なるべきを信ぜんとす。

國旗の影

膨脹日本の時代は來り、隣邦の獨立を扶植せんが爲めの義戰は方に戰はれつゝあるなり。

七月二十三日の牙山沖、七月二十九日の成歡驛、陸に海に我が武揚り我威輝く。

武夫が高麗の荒野にふりかざす
國旗のかげに靡かぬはなき。

一致

一旦韓清に事あるや我が四千萬の同胞は恩怨を忘れて相一致し、敵愾心の溢るゝ所、恤兵部の事務繁忙を極めり。

學生に由て恤兵せらるゝあり。寡婦に由て義捐せらるゝあり。岩崎、澁澤、三井、福澤、東久世等の人々に由て國家の歳入と均しき兵費を募らんとするにあり。有栖川其他宮妃殿下の旨を奉じて六十一人の貴婦人に由て軍隊慰勞金を集めらるゝあり。

年と事業

米國紐育の大學教授ジオーヂ、オエム、ベード氏は、人類の年と精神の働作及び事業との關係につき一の調査をなし、三十年より四十年を金季とし、四十年より五十年を銀期とし、五十年より六十年を鐵季とし、六十年より七十年を錫季とし、七十年より八十年を木季としたり。

且つ氏の調査に據るに、世界に顯れたる事業の七割は其齡四十五年前の成効に係り、現に神學心理學哲學上の著明なる大發明の過半は、其齡二十年より五十年の間の結果にあらざるはなしと。

飲酒と死亡

瑞西國十五の大都府にて千八百九十二年に、二十歳以

上の死亡者男女合せて六千五百九十六人ありしよしなるが、内酒を飲むことが近因又は誘因となりて死したるもの、四百二十七人ありたりと云ふ。即ち百人中六人五の割合なり。

男子のみにて計算すれば、三千三百四十三人中酒の爲に死せるもの三百六十一人、即ち百人中の十八人八なり。

而して女子は百人中二人に當る。

又此の三百六十一人中、年齢を以て別てば、二十歳以上三十九歳以下の者百人に對する二十二人七を占め、四十歳以上五十九歳までが五十五人七、六十歳以上が二十一人六に當りたりと。

飲酒の害亦恐るべきにあらずや。特に四十歳以上六十歳以下にして、最も一家のために爲すあるべきもの、之が害に逢ふこと第一なるを見れば、飲酒の人は大に省る所なかるべからず。

人の命

人間の死亡數は近時の統計に據るに一年間全世界にて三千六百萬人、一日平均九萬五百五十四人に當り、一秒時間に一人の割合なりと云ふ。

而して平均命數は三十八歳にして、死亡者全數の四分の一は七歳未滿にて死し、半數は十八歳未滿にて死す。

又百歳の壽を保つものは一萬人中一人、九十歳のものは五百人中一人、七十歳のものは百人中一人なり。

又七十歳のものは、職業を以て別つに、僧侶及び政治に關する人四十三人、農業者四十人、職工三十三人、兵士三十二人、敎員二十七人、辯護士及び工業技師二十六人、醫師二十四人。（一雜誌に見ゆ）

世界の人口

或る物好きなる統計家の統計する所に據れば、世界の人口は毎二百六十年に二倍すと。

去ればこそ、世界に人口充實の後を氣遣ふ杞憂家も出でたれ。

再版

家庭叢書第一卷 家庭の和樂

定價拾錢郵稅二錢

本書に對し已に發表せられたる天下の公評は左の如し

民友記者我邦家庭の爲めに努むると漸し先には家庭雜誌を發行し今亦た家庭叢書なるものを出版す此書は其の第一卷たり記事引例共に簡易にして婦人小兒にも解し易からしむ、努めて懈らずんば其の家庭の品格を高くし平和を增し且つ康樂と祝福とを來すこと必らず少なからざらん（報知新聞）

是れ專ら平民主義の風儀を家庭の奥までも實施演行せんとする民友社一流家庭叢書の一として新たに版行せられたる袖珍平易の冊子にして家庭の和樂を望む女派の人々先つ一讀して可なり（二六新聞）

此書は我邦家庭の品格を高うし家庭の平和を增加し家庭の康樂と祝福とを多く來さんが爲めに世に介せられたるなり左れば是れより健全なる而も和樂に滿されたる家庭を形ち作らんとする者は勿論無味蠟を嚼むが如き反目敵味方の如き猜忌異宗の如き一口に云へば敵同士の集りの如き家庭は此を讀んで其の弊竇を洗滌すべし傍訓つきなれば婦人先づ第一に讀んで次でうちの人にも讀んで貰ふべし。。。（大坂每日）

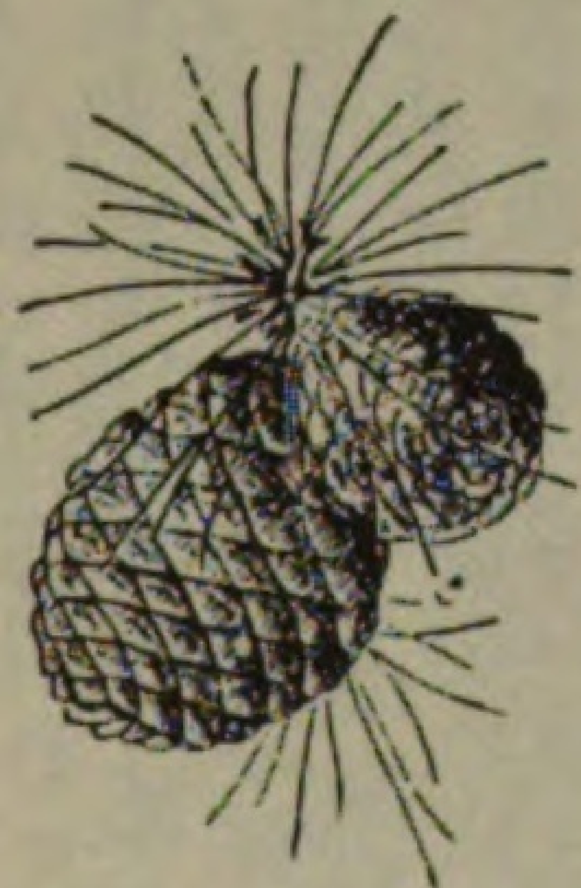
民友社より新に發行する「家庭叢書」の第一卷にして彼の「平民叢書」と形を同うせる小冊子なり、例の平易なる文章をもて健全なる家庭を作るの法を說く所、民友社の獨得也、思ふに平民の友といふ平生の主義に背かず孜々として社會改善の方法を講ずるの誠意及び其の手段の宜しきを得たるは、方今民友社を第一とすべし、此の書に說く所もとよりコンモンセンスたるに外ならねど其のコンモンセンスたる所すなはち其の健全なる所なり、吾人は此のフランクリン的敎誨の彌々いでゝ彌々深切ならんことを希望す（早稻田文學）

例の平民的口調を以て平易に綴れる小冊子なり家庭道德頹廢せる今日に在りては聊か改與の一助たらんか（國會）

家庭叢書の第一卷として、發兌せられたる一小冊なり。『家庭の品を高くし、家庭の平和を增加し、家庭の康樂と祝福とを多く來さんが爲めに候』と德富猪一郎氏が緒言に在るが如く、實に我國の家庭に切要なる新著なり。書中記する所、驕奢を誡め、節儉と力行とを勸むること、最も周到にして、家々の內君を益すること大なるべし。借金を積みつゝ外見を飾るは、一般の風ともいふべき有樣なる今日、かゝる書を繙きては、我ながら此炎天に腋の下より冷汗を漲さゞる內君家宰は幾人かあるべき。唯恨むらくは此書も例の民友社流の筆法なれば、僅に高等小學校の卒業位の家庭の婦女子には解す能はざるべきを。（少年園）

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行